

研究紀要 11

目 次

縄文時代の石器再考—打製石斧（1）—	宮里 学	1
中世六十六部聖の奉納経筒について	田代 孝	15
近世軒平瓦の分類について—甲府城を例にして—	柏木 秀俊	23
県道塩平～窪平線拡幅工事に先立つ牧丘町曲田遺跡調査報告	高野 玄明	39
甲府市八幡神社採集の縄文土偶	小野 正文	45

1995

山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター

序

山梨県立考古博物館ならびに山梨県埋蔵文化財センターの研究成果を集めた『研究紀要』11号を刊行することになりました。全国各地の埋蔵文化財センターが調査報告書を刊行するだけでも、大変な労力と努力が強いられるなかで、発掘調査の現場と整理作業の過程で研究を進展させることは並大抵のことではないと思います。それにもかかわらず『研究紀要』を世におくることができたことは、関係各位の努力によるところが大きいと思います。

今回の紀要には3篇の論説と、報告・資料紹介各1篇ずつが収載されました。宮里学の「縄文時代の石器再考—打製石斧（1）—」は、打製石斧の製作技術と製作場所について、東京都の特定の遺跡を対象に製作実験を通して論じた内容であります。田代孝の「中世六十六部寧の奉納経筒について」は、山梨県の中世経塚4例を論じつつ社寺奉納経筒と経塚納経の実態を考察し、16世紀後半の戦国期社会の動向を論じたものであります。柏木秀俊「近世軒平瓦の分類について—甲府城を例にして—」は、現在調査続行中の甲府城の膨大な近世瓦を扱った論文であります。江戸時代の軒平瓦を対象として分類と編年観を提示し、とくに二重軒草文の分類に力点をおいており、近世城郭研究に貢献できるものと思われます。高野玄明の牧丘町山田遺跡の調査報告は、縄文時代前期から平安時代にいたる複合遺跡で、奈良・平安時代に集落の拡大が見られるという特色を示しています。また小野正文の「甲府市八幡神社採集の縄文土偶」は、中期の「広畠土偶」に関する資料提示であります。

上記の諸論致が山梨県の考古学界は勿論のこと、広く全国の考古学研究の発展に貢献できるとすれば、望外の喜びとするところであります。県立考古博物館と埋蔵文化財センターが設立されましてから今年は13年目にあたります。山梨県における埋蔵文化財の調査体制と保護行政は大きく前進ましたが、なお解決すべき課題の多いことも事実であります。考古博物館も本年の秋には特別展「黄金の都—シカン発掘展—」を開催する予定です。機関の責任者として今後とも努力をかさね、より一層の充実をはかる決意でありますので、些少にかかわらずご教示と忌憚のないご批判を賜りたくお願い申し上げます。

1995年3月

山梨県立考古博物館長
山梨県埋蔵文化財センター所長

大塚初重

縄文時代の石器再考 -打製石斧(1)-

宮里 学

1はじめに

4検証

2打製石斧の再認識と問題提起

5おわりに

3実例

1はじめに

野外での調査をしていると、興味深い体験や思いもよらない閃きを受けることがある。

ある遺跡を調査中、年配の男性に「ここから、鎌が出てきたよ」と呼び止められたことがあった。調査中の遺跡は縄文時代中期である。当然、搅乱などに紛れ込んだ現代のモノだという判断をしたが、見てみると形の良い立派な石匙であった。

同じ遺跡を調査中、別の男性の方から「石の鎌が出た」と言わされたこともあった。この時、筆者は即座に打製石斧のことをいっているのだろうと直感し、その石器についての説明をしたことがある。しかし後日、よくよく考えてみると、二つの出来事がとても興味深いことだと気が付いた。

一つは、発掘調査の経験がほとんど無い両者が述べた、二つの石器について、それを「道具」であると判断し、且つ、それぞれにイメージした機能を農耕具に見立てて表現したことである。現代のように様々なモノが氾濫しているなか、もっと別のものに言い換えることもできた筈ではないかと思える。

もう一つは、それが直感による発言であったこと。「どうして鎌だと思ったのか」という筆者の質問に、特に根拠らしいものはなかった。

「石の鎌」といった石器について、それが石で作った斧で、打製石斧と呼んでいると説明した。この時に、当人から何故「斧」と呼ばれているのか、こんなに石の薄い斧で本当に木が切れるのかなど様々な質問がされ、それらに答えながらも筆者自身に多くの疑問が残った経験がある。

石器の機能全般に関しては、概ね切る、削る、剥ぐ、割る、刺す、掘る、擦るものと受け皿、土台といったところであろう。これに関しては、統一見解がされていると思うし、器種によつてはその石器がもつ機能をかなり限定させることは可能であろう。しかし、抱える問題、具体的には形態や機能、時期差地域差など各器種とも多いし、未開拓な部分も山はある。

今回は、この様な中でも打製石斧を取り上げるつもりだが、実際のところは磨製石斧、石匙、凹石、磨石など縄文時代の石器というものは、各々石器の誕生（製作）から終焉（廃棄・遺棄）までのあいだ、どの様な過程を経過してきたのか理解の領域には到達していない。

同時に、人の行動や営みを反映している要素部分を所有する遺物として、取り分け中でも軽

視されてきた石器について今後期待するのは当然の事だし、各研究者の責任も重大である。

ただ、こんなことはだいぶ以前より言われてきたことであり、誰もが気づいている事ではないのか。

筆者自身の気持ちとして、もう一度各々の器種について検討を加え、軽少でも縄文時代の石器研究について新たな局面を迎えることができたら幸いと考える。今回は、先駆けとして打製石斧を取り上げ以下に展開していく。

2 打製石斧の再認識と問題提議

打製石斧という名称を持つ石器は、縄文時代の石器の中でも取り分け代名詞的存在であろう。

縄文時代の、特に中期の遺跡から多量の打製石斧が出土することは、地域的あるいは遺跡の形成される地形的な影響による偏りもあるが、実績から多くの人が認める事実である。しかし、この打製石斧についてどれだけの人がなにを知っているのだろうか。些か疑問である。

打製石斧に限定せず、縄文時代の石器についてはまだ検討の余地と資料としての活用の場が不充分である。

石器研究全般も踏まえて打製石斧の現状について少し述べておこう。ここではあえて個体的、集合的という表現を使わせて頂くが、後者の集合的研究は、石器組成や分布など、遺跡単位や地域単位あるいは文化圏単位というように相対的な石器の捕らえかたを軸とする方法で、目下のところ進取的とまではいかないが、取り組みがなされている方法である。

一方、前者の個体的研究は、一個体の石器あるいは一個体を含めた一括資料を対象とし、特に遺跡単位でおこなうのに適した方法であるが、現在では停滞期にあるといえる。

本論で取り上げている打製石斧についてはどうか。特に江戸時代から昭和初期における学史を詳述する予定はないが年代で追ってみると、1970年代から1980年代初頭にかけては、東京都日野市日野吹上遺跡¹¹⁾の資料から打製石斧の製作工程を考察した白石浩之氏、京都府舞鶴市桑原下遺跡¹²⁾の打製石斧に残る摩耗痕や擦痕の観察から打製石斧の運動方向を理解し用途解明に努めた鈴木忠司氏、東京都小金井市栗山遺跡¹³⁾で打製石斧の形状や自然面の存在、石器の刃部加工や反りに着目した渋江芳浩氏らをはじめ、同市貫井南遺跡の事例で小田静夫氏¹⁴⁾は石斧の多角的分析として石質から摩耗痕まで多方面からの分析方法を紹介し、また、同市貫井遺跡齊藤基生¹⁵⁾氏らの研究が代表として挙げられよう。

各氏の研究は、遺跡単位での石器、特に打製石斧を未開拓な着眼点からの観察や接合作業など細かな作業をおこない、新しい切り口で考察する打製石斧研究の新古を画する時期であり、そして斎藤基生氏¹⁶⁾の論文により大きく集約されるものである。

しかし、この時期は打製石斧を初めとする縄文時代石器研究の始まりであり、一つの基礎となるべきものであることを失念してはならない。

齊藤氏も警告する「今後は、…（中略）…遺物の認定というもっとも初步的な段階からやり直し、…（中略）…顕微鏡下の使用痕の観察などミクロなデータの収集も大切である。さらにひとり打製石斧だけでなく、…（中略）…他の種類の石器との関係を明らかにしつつ、石器組

成全体における位置付けをしなければならない。とにかく今まで見過ごされがちだった打製石斧が注目を集めるようになってきたのは大変喜ばしいが、まだ研究は始まったばかりであり、だからこそ研究者がより早く…』と⁷⁾。1983年の言葉である。

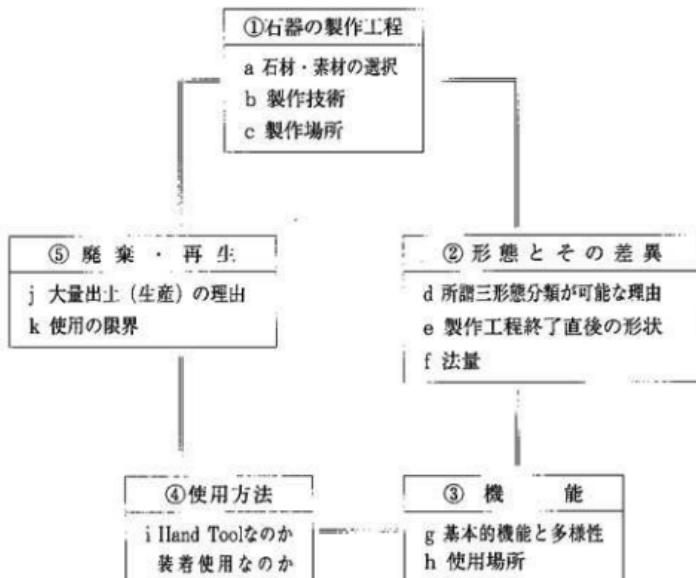
さて、これ以降から現在まではどうか。1980年代には調査された遺跡単位での考察として公表されることがほとんどである。

東京都羽村町山根坂上遺跡では打製石斧の接合関係や欠損部位からその使用に伴う活動範囲の考察を梶原勝氏が⁸⁾、砂田佳弘氏は同国分寺市恋ヶ窪遺跡で打製石斧素材剥片剥離工程を理解し、欠損面に着目して使用過程の考察をおこなっている⁹⁾。

また、同調布市原山遺跡でも完形打製石斧よりも折損した資料に重点を置き折損面の観察や接合資料のデータ提示、そして折損打製石斧の器原と折損方向の相関性などを報告している¹⁰⁾。

上述した様に、各遺跡単位での打製石斧にたいする積極的な対応はまるでない訳ではない。むしろ、各々が打製石斧の機能解明へ向けて様々な着眼点からアプローチをかけている。しかし、結果としてどの程度打製石斧という一器種を既知できているのかは分からない。

周知かも知れないが、打製石斧に関する基本的な問題点を考えてみると次のことが挙げられる。



あくまでも便宜上①～⑤で一区切りできそうな基本的問題点を図み、更に個別の問題点を挙げた。中には結果が一つに収まるはずがないものや、今後の資料蓄積が解答に結び付く可能性があるものもあり、なによりもこれだけ多くの問題を打製石斧が今もって抱えているのは何處に問題が所在するからなのか。

反面これに対して、現在までに打製石斧を理解するため、個々の遺跡より出土したものにどの様な点にどの様な観察点が設けられてきたのか、これまでに実践されてきたいいくつかの分析項目を以下に列挙してみる。

- | | |
|----------|---------------------|
| ・形態分類と法量 | ・接合関係 |
| ・素材剥片 | ・自然面 |
| ・反り | ・側縁部の「たたき」「つぶれ」「すれ」 |
| ・使用痕 | ・折損部位 |
| ・折損面 | ・器厚と折損方向 |
| ・刃部形態 | |

これらの分析項目が、打製石斧を理解するために不可欠な情報を引き出すことに有効であろうに違いない。全体を見ても、これだけの分析項目が設けられて一器種が検討されるということは縄文時代の石器の中では類がない。

しかし、その成果についてはどうか。一遺跡からの単発な報告で終わってしまい発展性はなかった。原因は分析基準の不統一や継続的な作業の欠落に問題がある。

さて、打製石斧の現状は述べてきたように1970年代以降からの膠着状況から脱却できていないといえる。それでもう一度、打製石斧について再検討するには充分な期間も経っている。この事について拙稿では体系的に打製石斧を再検討する事とした。その中で、打製石斧について実践に重点を置き、比較・検証というスタイルを採用していきたいと考えている。今回は、その第一段階として打製石斧製作に相關する部分について論を展開していく。

具体的には、打製石斧の製作技術と製作場所に焦点を当ててみた。方法と詳細については後章に記載するが、大きな方針としては問題点を多く抱える打製石斧を的確な項目のもと再検討することであり、基本問題①を実際の事例と実験で方向付けすることにある。

3 実例

この章では、発掘調査から得られたデータを報告書より抽出し、後述する実験結果と比較検討することを目的としている。

具体的にどこの遺跡のデータを使用するか、幾つかの報告書を検索した。しかし、必要なデータが、石器の出土器種や出土量という範囲ではなく、石核や剥片、調査中では見落としてしまう様な碎片といったかなり細かい部分であり、また、それらの遺物が存在しても報告書では割愛されることも多く、収集には困惑したが、幾つかの報告書の中から、東京都調布市の原山遺跡を比較検討のデータとして選択した。

原山遺跡は、調布市原山遺跡調査会により1989年秋から1991年に本調査が行われた、縄文時

代中期の集落遺跡で、概要は次のとおりである¹⁰。

調査地点は、武藏野台地で流路を南西にとる野川左岸に位置し、割田市柴崎1丁目31番付近である。調査面積は2650m²で、調査された縄文時代中期の住居は40軒以上、遺物は出土地点が記録されているもので土器約11万点、石器と礫約7万点を数える。

今回、原山遺跡を取り上げた経緯は以下のとおりである。

- ・概要で記述したように、縄文時代中期の集落遺跡でデータとして纏まりがあり
- ・且つ、積極的な調査内容であったこと。
- ・報告書についても同様で、掲載情報量が豊富で、細部についても細かく掲載されている。
- ・打製石斧の出土量が石器出土数全体の27%と多い。
- ・筆者自身が調査当時よりこれらの遺物に接触する機会を与えられたこと。

この様な理由により「はらやま」報告書を使用するが、原山遺跡出土の石器を今回の目的、「打製石斧を製作した場所」と言う観点に沿って見てみる。

方法として、打製石斧の出土数に対して、数量的に石核、剥片、碎片の出土量がどの程度なのか、つまり、打製石斧を一点製作したと想定し、製作工程各段階で生み出される石核、剥片、碎片の排出量とはどの様な相関性にあるのかを1つのモデルケースとして以下に検証する。

第1表は、出土した石器と礫の出土割合、石質別内訳¹¹、器別内訳という目的に応じたデータを抽出し改変したものである。

データによると、調査範囲より出土した石器・礫の出土数は73,867点（内訳：石器16,417点 磚57,450点）と極めて多量だが、両者の比率は8対2で礫が石器を圧倒している。この場合の礫とは、器種別内訳表にあるA～Kに含まれないものを指している¹²。石器に分類された合計数16,417点のうち、注目すべき打製石斧は完形・折損¹³含めて4,513点（27.5%）という数値になっている。

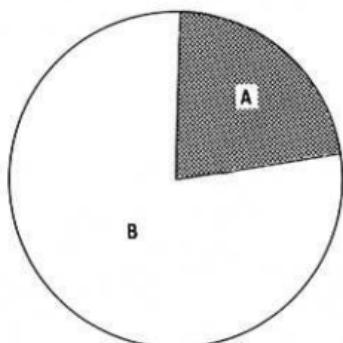
そこで、単純に打製石斧1点当たりの剥片と碎片の点数を算出してみる。

打製石斧の完形・折損を含めて1点当たりにつき剥片（出土数3,788点）では剥片0.8点、碎片（出土数6,259点）では1.3点が算出される。更に、打製石斧に黒曜石製のものが出土していないため、石質別内訳にある黒曜石7,724点という数値は、黒曜石の剥片、碎片の数量は把握されていないが除外可能と判断する事ができ、当然先に算出した打製石斧1点あたりの剥片、碎片の点数は減少する。更に、打製石斧以外にもスクレイパー（含む石匙）や他の器種の製作、使用を行っていることも付加して考慮しなければならない¹⁴。

打製石斧に利用された石材については確かにいくつもの種類に分類されるが、大きくみると石質や色調などの点から供給源ごとに分類可能な様相を持つものである。

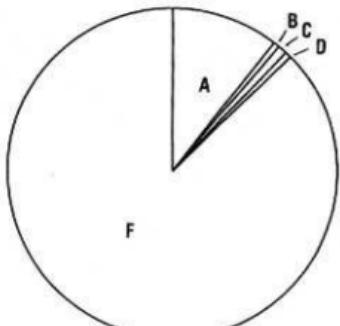
結果として上述したモデルケースで考えてみると、原山の「打製石斧の製作場所」とは、少なくとも調査範囲内で打製石斧という石器の製作工程が恒常的に行われていたとは考えにくいと位置付けられる。

また、石核の出土数72点は、打製石斧の出土数と比較すると、数量としては極端に少ないと位置付けの補強的なデータの提示となる。



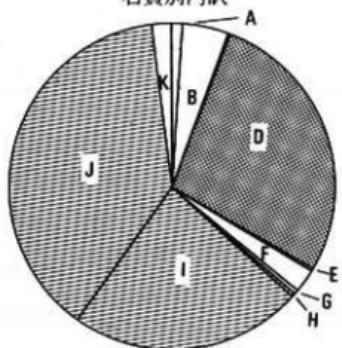
石器・礫出土割合

(単位: 個)	
A—石器	16,417 (22.2%)
B—礫	57,450 (77.8%)
合計	73,867



石質別内訳

(単位: 個)	
A—黒曜石	7,724 (10.5%)
B—麦岩類	428 (0.6%)
C—閃綠岩	675 (0.9%)
D—凝灰岩	461 (0.6%)
E—軽石	9 (0.0%)
F—砂岩・頁岩など	64,570 (87.4%)
合計	73,867



石器の器種別内訳

(単位: 個)	
A—尖頭器・石鎌	182 (1.1%)
B—石錐・スクレイパー類	752 (4.6%)
C—礫器	29 (0.2%)
D—打製石斧	4,513 (27.5%)
E—磨製石斧	56 (0.3%)
F—磨石・敲石・石皿	372 (2.3%)
G—砥石・浮子・石錐	67 (0.4%)
H—石核	72 (0.4%)
I—剥片	3,788 (23.1%)
J—碎片	6,259 (38.1%)
K—器種不明・その他	327 (2.0%)
合計	16,417

「はらやま」1993の下巻第6表を改変

第1表 原山遺跡出土石器集約

但し、原山の調査の場合、調査範囲が集落域の全面を調査した訳ではないことを明記しておく。

4 検証

この章では、第3章で述べた「打製石斧の製作場所」の位置付けを検証することに目的を持ち、比較検討するためにおこなった打製石斧製作実験の方法と結果、そして得られたデータの提示を記載することにする。

以下に、実験の手順と方法を記述したうえで、その成果を提示する。

第一に、石器の素材となる石材は、東京都を南北に流れる多摩川（多摩市・日野市・稲城市周辺）の河岸の転石する原石を利用することにした。

以前、筆者らがやはり縄文時代の石器を調べる基礎資料を製作するにあたり、石器石材の獲得源を探ろうと踏査したところ、周辺に立地する遺跡より出土した石器石材とその石質がよく類似しており、また転石している原石の種類も、遺跡より出土して判明した石材別利用頻度とはほぼ一致していることなどから、多摩川及びその支流に着目し、その河岸の転石を利用することした。

なお、本論より若干主旨が外れるが、この多摩川付近の転石は、非常に石器製作に適したものが多いと考えている。石材としては、転石の60%以上が砂岩で、他に頁岩、粘板岩、閃緑岩、赤色のチャートが観察できる。砂岩、頁岩については、拳大～人頭大程度の種が多く、若干の節理が観察されるが、緻密で石器石材に適しているようである。赤色のチャートは10cm程度のものが極めて少量しか観察できず、また節理が多く発達しているのも特徴で、石器石材としては不適格なものであった。

さて、打製石斧の製作工程であるが、この段階での最大の問題は、それはやはり、打製石斧の製作工程や技術そのものにある。

確かに、縄文時代の石器は一部を省き、先行した旧石器時代に見られる石刃技法というような明確な石器生産技術として捉えるには、やや困難な代物であろう。この点については、後述する研究内容のほか、ここ数年あまり石器生産技術の解明に向けて活発に議論されたというような形跡は多くないという経緯と、製作工程や技術を解明する出土資料も數例と極めて少ないという現状がある。結果的にはこの点が、縄文時代の石器研究の停滞の原因なのであろう。

打製石斧の生産技術についていえば、やはり高度な技術はあまり必要ではないようである。実際に出土した打製石斧について、表面上に見える自然面に着目して観察してみると、両面に自然面が残り、縁辺部を主体に加工・調整を施しただけの出土資料や、逆に片面のみに自然面を残し、両面に加工・調整を施したもの、また、原石のあら割りによる分割、あるいは素材剥片を剥離する段階で、節理面が起因となり素材剥片が剥離され、偶然の空洞を想像させるものを利用している資料など、要は出来上がりの形態を重視し、そこまでの過程には、さほど影響されない石器であるとし、且つ技術的系譜を理解することは困難であると判断した。

この様な現状のなか、今回の製作実験にあたり筆者は次表にある石器製作の工程を経て、製

作した石器の出来上がりが、出土資料と形態として類似することで進めていくこととした。

この石器製作工程表は、砂田佳弘氏の「打製石斧製作プロセス」の研究を基本とし（砂田1982）、大きくは3つの製作工程を設定し製作した。

1 まず、原石を分割する。分割後の原石より、素材剥片を1点または複数点剥離する。素材剥片の獲得点数は、当然分割後の原石の大きさに強く左右されるが、素材剥片1点のときは製作工程Ⅰとなり、複数点では右核からの剥離作業の繰り返しをおこない製作工程Ⅱとなる。

この場合、直接打法、間接打法は問わない。また、打製石斧の特徴としては自然面が残存している可能性は極めて少ない。

2 1と異なる点は分割工程が削除されていることである。原石から直接素材剥片を剥離するもので、工程のⅢないしはⅣにあたり、原石の形状と大きさにかなり影響される。

この場合、直接打法、間接打法は問わない。また、打製石斧の特徴としてはどちらか一面に自然面が残存している点である。

3 原石を直接加工調整して製作するもので、工程Ⅴになる。例えば、偏平で梢円形の原石を直接利用するのが効率的である。当然、原石の形状と大きさが出来上がりに影響してくれる。

この場合、直接打法、間接打法は問わない。また、打製石斧の特徴としては石器の両表面にかなりの確立で自然面が残存する。

工程Ⅰ	分割	→	打製石斧素材剥片	加工調整	
工程Ⅱ	分割	石核	打製石斧素材剥片	加工調整	
工程Ⅲ	原石	→	石核	打製石斧素材剥片	加工調整
工程Ⅳ		→	→	打製石斧素材剥片	加工調整
工程Ⅴ		→	→	→	加工調整

打製石斧製作工程

（砂田1982改変）

以上の工程を設定し、製作実験に入ったが部分的な説明を若干記載しておく。

原石は、持てて移動することや分割のおこないやすさから、平均して30~50cm前後のものを使用した。石材には特に拘らない。

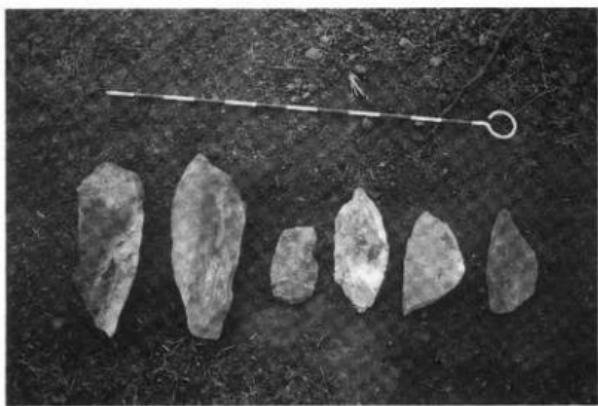
分割に際しては、殆ど地面に叩きつけて割る方法を探った。大半の場合、1~3回程度の叩きつけで分割が可能であった。

分割された原石は、素材剥片を得るために打面を作出したりして素材剥片を得たが、分割の段階で偶然に素材として適した剥片が得られたり、同時に素材剥片の獲得に努めた（図版1）。

加工調整の段階では、素材剥片の縁辺部に、直接打法、間接打法、両極打法を駆使し作業を行う。更にこれらの各工程は、常に一つの流れの中にある訳でなく、選択行為や繰り返しの行



図版1 分割した礫と剥片



図版2 作出された剥片

為など、いくつかの諸要素が付加されるものである。

特に3（工程V）は、適当な原石の入手さえできれば他と比較して最も経済的に打製石斧を製作できる。結果として、打製石斧製作にかかる所要時間は10~15分の工程で終了する。

ただし、製作工程に途中で素材剥片に節理があったり、石の目を読み切れなかったりという原因で加工・調整の段階で折損現象が生じることもかなりの確率で発生した[※]。

さて、ここから第3章で詳述した原山遺跡との比較データを提示する。

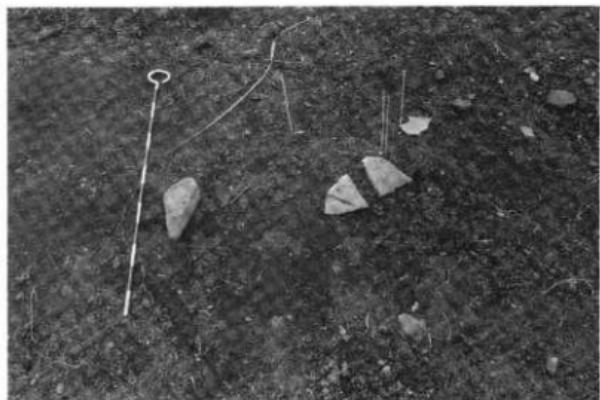
打製石斧の製作実験の提示データは図版3・4・5に掲載したとおりであり、以下にその説明を加える。

図版3は、素材剥片が加工・調整を目的とした直接打法一回の作業で折損してしまった例であるが、4点の剥片を生み出している。この素材剥片を利用した製作はこの段階で放棄した。

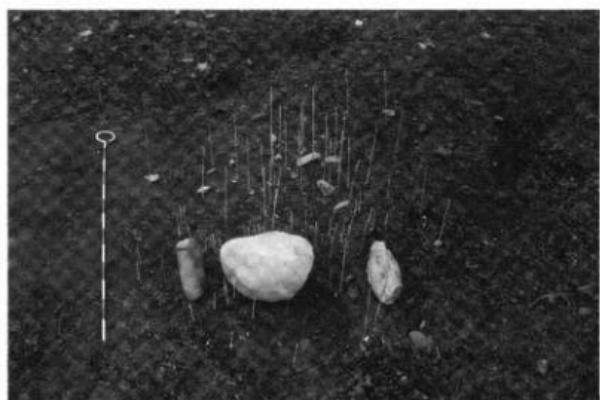
図版4は、一点の打製石斧を製作した場所を記録したもので、状況としては、作出した素材剥片を加工・調整し、完成した段階までのものである。写真の中央が両極打法の際上台となつた台石で、左はハンマーとして使用した砾である。

この作業で、生み出された剥片は約2～8cmのものが36点（図版では長い串）、1cm以下の碎片（図版では短い串）が40点弱となった。

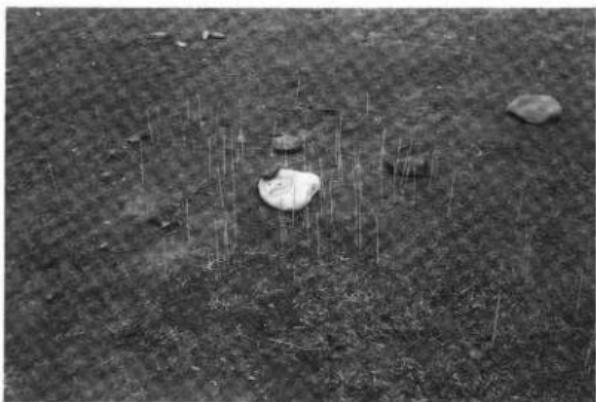
図版5は、分割した砾から素材剥片を獲得し加工・調整段階までの状況を記録したものであ



図版 3 打製石斧製作状況



図版 4 打製石斧製作状況



図版 5 打製石斧製作状況

る。この作業で生み出された2cm以上の剥片は約80点を越え(図版では長い串)、碎片については百数十点となった。

この時は直接打法、両極打法合わせて50回近くの作業量であり、周辺3~4cm四方に剥片と碎片の飛び散りが確認された。

これらは、いくつか行ったなかの事例であるが、概ね一点の打製石斧を製作するに当たりどの程度の剥片、碎片が生み出されるのかデータとして提示できていると思う。

5 おわりに

本章では、第3・4章で述べてきた二つの成果の比較を行い総括のまとめとしたい。

・結果として、製作実験から打製石斧を一点製作した場合に生み出される剥片、碎片の数量と原山遺跡で出土した打製石斧とこれに割合として伴う剥片、碎片の数量には大きな差があることが明確になった。本来、石器製作を遺跡内で行ったとする考えだと、調査方針や調査状況も影響するが、出土量はもっと多いはずである。

・そして第4章でも述べたように、打製石斧の製作技術が確立されたものではなく、且つ遺跡内より大量出土する事例も考慮し、つまり今風にいうと簡単に大量に生産し消費することから、最終的な加工・調整は遺跡内で行ったとしても、打製石斧を製作した場所は、石材が豊富にある石材供給源であり、このことは、第3章でも述べた石材の様相からも伺えることができる。

これらのことから、原山遺跡の場合基本的には遺跡外(集落域外)で打製石斧の製作を行ったと考えるのが妥当であるとしてとりあえずの結論としておきたい。

今後に向けて

今回は、縄文時代の打製石斧の製作と製作場所に焦点をあててみたわけだが、テーマとして

は1970年代に武藏野台地の遺跡を中心に斎藤基生、渋江芳浩氏らなどが精力的に取り組んできた経過を持ち、その繰り返しとなってしまった感も強く残った。しかし、縄文時代全般の石器を再検討することを長期的な目的とする場合、やはりこの年代の成果は通過せざるを得ないものである。

さて、今回のように原山遺跡の調査結果を元にして、実験を踏まえ検証していくという方法もあり得るのだから、打製石斧に限らず一方法として今後も他の器種とも継続していきたい。

そのためには、調査段階或いは報告書の在り方も重要な検討事項となってくる。今回は、剥片や碎片といった資料が対象となった訳だが、実際のところ、これらの資料が出土遺物として報告されることは極めて稀で、なかなか日の目を見ない。同様に、破損・折損した石器も取り分け見落とし、割愛されてしまうことが多い遺物である。

現状には、遺物の完形主義とでも言うべきものが根強く残っている背景がある。反面、少なくとも壊れた資料は完形品より1つは違った情報を持っているのである。完形品を配列するだけでなく、様々な資料を多角的に検討することは、新たな着眼点、検証法を生み出す第一歩になるに違いない。就中、どんなに小さくても、壊れていってもこれもまた遺物である。様々な状況に置かれて苦慮が続くが、たとえ出土位置が記録できなくとも可能な限り遺跡より回収し報告することを希望する。

そして想像、想定、推定の範疇から脱却することに努めるべきである。

意識という頭の中での理解、解釈でしかない事が多い。根拠を実証することに著しく欠如している。これは石器、上器を問わず、また同様に海外の民族例が多く取りだされ、あくまで民族事例だと警告されているにもかかわらずいつの間にかそれがまるで当時を再現したかのように語られ、潜在的に思い込んでしまうことが多分にある。決して民族例を提示することが悪いといってはいる訳ではない。自身も民族事例を探してみたり、参考にすることもあるが、その前にもう一度、1つの器種、1個の石器をじっくり観察し、新たな切り口を模索することをお願いしたい。

（謝辞）

まず、原山遺跡の資料を掲載することについて快諾された東京都の黒尾和久、渋江芳浩氏、寒い中、製作石器実験に援助いただいた帝京大学の佐藤昌章氏に感謝いたします。そして、筆者の指導教官であり帝京大学助教授考古学研究室の阿部朝衛氏には当初よりご面倒と有益な助言を戴き、深謝して御礼申し上げます。

註・引用文献

- 1) 白石浩之 1970 「打製石斧の製作技術論」『日野吹上遺跡』 日野市吹上遺跡調査団
- 2) 鈴木忠司 1975 「打製石斧」「桑飼下遺跡発掘調査報告書」 半安博物館
- 3) 渋江芳浩他 1975 「栗山」小金井市文化財調査報告書4 小金井市教育委員会
- 4) 小田静夫 1976 「縄文中期の打製石斧」『どるめん』10 JICC出版局

- 5) 齊藤基生 1978 「貫井」小金井市文化財調査報告書5 小金井市教育委員会
- 6) 齊藤基生 1983 「打製石斧研究の現状」『信濃』35-4
- 7) 出典は註6と同じ。
- 8) 下線は筆者か要約とすることを記す。
- 9) 梶原 勝 1981 「縄文中期後半の石器について」『山根坂上遺跡』 東京都建設局 羽村町羽ヶ田上・山根坂上遺跡調査会
- 10) 砂田佳弘 1982 「打製石斧について」『恋ヶ窪遺跡調査報告』 同分寺市教育委員会
- 11) 黒尾和久他 1993 『はらやま』 原山遺跡調査会
- 12) 体系的にとは打製石斧の製作から廃棄・遺棄までの過程を段階を追っていくことをいう。
- 13) 註11と同じ
- 14) 抽稿には「石材」と用語統一してあるが、出典(註11)には「石質」とあるためそのまま用いた。
- 15) この場合は自然礫をさし、人工的な要素が加わるものははいらない。
- 16) 石器の壊れを表現する用語として折損・破損・欠損が多用されるが認識が明確ではないため拙稿では折損で統一しておく。
- 17) 参考に貫井遺跡の事例をみると、斎藤氏の観察結果では出土した打製石斧約1600点に対し同石質の剥片は約1800点であり、打製石斧1点当たりの剥片は1.1点と算出されている。このデータの出典は註5)と同じである。
- 18) 調査範囲について触れたのは、未調査部分に石器製作の場所が存在する可能性があるためであるが、おそらく全体の3分の2程度であろう。
- 19) 折損現象とは註16)にあるようにほかに的確な表現があるかもしれないが統一用語として使用した。

参考文献

(石器全般)

- 1983 鈴木次郎 「打製石斧」「縄文文化の研究」7 有山閣
- 1985 阿部朝衛 「縄文時代研究の視点と方法」『法政考古学』10
- 1989 竹岡俊樹 「石器研究法」青叢社
- 1994 佐原 真 「斧の文化史」東京大学出版会
- (本論に係わる打製石斧関係の文献)
- 1906 大野雲外 「石斧の形式に就て」『東京人類学会雑誌』21-240
- 1906 大野雲外 「打製石斧の形式に就て」『東京人類学会雑誌』22-250
- 1970 白石浩之 「打製石斧の製作技術論」『日野吹上遺跡』 日野市吹上遺跡調査団
- 1970 木村 剛 「縄文時代石器における機能上の実験」 『考古学ジャーナル』43-50
- 1971 木村 剛 「縄文時代石器における機能上の実験」 『考古学ジャーナル』54
- 1972 木村 剛 「縄文時代石器における機能上の実験」 『考古学ジャーナル』74-75

- 1973 小林康雄 「縄文時代の石器研究史」「信濃」25-7
- 1973 小林康雄 「縄文時代の石器研究史」「信濃」25-10
- 1974 小林康雄 「縄文時代生産活動の在り方（1）」「信濃」26-12
- 1975 小林康雄 「縄文時代生産活動の在り方（2）」「信濃」27-2
- 1975 小林康雄 「縄文時代生産活動の在り方（3）」「信濃」27-4
- 1975 小林康雄 「縄文時代生産活動の在り方（4）」「信濃」27-5
- 1975 渋江芳浩他 『栗山』小金井市文化財調査報告書4 小金井市教育委員会
- 1975 鈴木忠司 「打製石斧」「桑飼下遺跡発掘調査報告書」 平安博物館
- 1976 小田静夫 「縄文中期の打製石斧」「どるめん」10 JICC出版局
- 1977 小林公明 「縄文時代中期八ヶ岳南麓における農具としての打製石器」「信濃」29-4
- 1978 斎藤基生 『貢井』小金井市文化財調査報告書5 小金井市教育委員会
- 1980 中島庄一 「打製石斧について」「向ヶ岡遺跡」多摩市教育委員会
- 1981 梶原 勝 「縄文中期後半の石器について」「山根坂上遺跡」 東京都建設局 羽村町
羽ヶ田上・山根坂上遺跡調査会
- 1982 砂田佳弘 「打製石斧について」「恋ヶ窪遺跡調査報告」 国分寺市教育委員会
- 1983 斎藤基生 「打製石斧研究の現状」「信濃」35-4
- 1989 今村啓爾 「群集貯藏穴と打製石斧」「考古学と民族誌」渡辺仁教授古希記念論文集
六興出版
- 1993 黒尾和久他 『はらやま』 原山遺跡調査会

中世六十六部聖の奉納経筒について

田代 孝

-
- 1 はじめに
 - 2 山梨の経筒奉納の遺跡
 - 3 社寺奉納経筒と埋納経筒
-

1 はじめに

中世に出現した六十六部聖は、法華經を六十六部書写し、これを国ごとに一部ずつ納経して回る者である。そして、諸國を回りして法華經信仰を勧める聖であることから回國聖とも呼ばれている。16世紀に入ると六十六部聖による納経は、經典を小形の経筒に納めて、各地の社寺へ奉納したり、塚を築いて埋納したりすることが盛行する。これらの規格化された小形経筒の発見地は、全国的には110数カ所、300点余が知られている。山梨県内においては、大六塚（上条東割経塚）・上藏原経塚・塔の越経塚・円乗寺経筒の4カ所が確認されている。それぞれすでに報告されているところであるが、その後一部の資料が長く不明となっていた。最近になって幸いにも資料の所在が判明し、その資料化が可能となった。ここに再報告を行うと共に、中世の経塚について若干の検討を試みたい。

2 山梨の経筒奉納の遺跡

①大六塚（上条東割経塚） 藩崎市大草町上条東割

大草公民館（旧大草小学校）の東方100メートルほどの大六塚で、六十六部聖の経筒が発掘されたのは、明治20年～26年（1887～93）頃と伝えられている。高橋健白による「経筒沿革考」（『考古界』第六篇八号 1907）の中で、大草村で発見された永正18年（1521）在銘の経筒として、山中笑・和田千吉らの報告と付記され紹介されている。なお、大永元年（1521）・大永3年（1523）在銘経筒が出土したというが、それについては触れられていない。「経筒沿革考」は、和田による銘文が示されているが、3文字ほど不明となっている。その後、木崎愛吉『大日本金石史3』大正10年（1921）、石田茂作『経塚』昭和4年（1929）などに取り上げられた。関秀夫氏の『経塚遺文』（1985）の中で、佐藤八郎氏教示の拓影にあった付記が紹介されている。「経筒 丈ヶ四寸七分 差渡シ毫寸六分タ径毫寸六分 銅ニテ金メッキ他、中ニ経トモ観シキモノノ腐蝕シタルモノアレドモ今ハ散乱シテ無シ、實物ハ同細野口英信氏所持也」とあり、経筒の高さが約13.5センチ、円筒形で銅板製鍍金である。銘文は次のとおりである。

本願「甲孫甘利庄住聖願興」十羅刹女「爲師長父母敬白」奉納人乘妙典六十六部内「十方弘那結縁」三十番神「永正十八年大辛巳今月日」

現在、大六塚はその痕跡を認めることはできない。さらに、永正18年在銘の経筒も所在が不明であったが、昭和61年（1986）に下関市立長府博物館所蔵になっていたことが判明した。半

成5年（1993）に山梨県立考古博物館の「山梨の経塚」展に出品された。

②上藏原経塚 北巨摩郡高根町藏原

藏原は八ヶ岳南麓南端部の尾根台地に位置し、集落は上藏原・中藏原・下藏原がある。上藏原の中村芳夫氏宅に隣接する山林内で、昭和33年（1958）4月、中村三郎氏が中村一男氏に依頼されて開墾したところ、盛土を崩した時に天文21年（1552）在銘の経筒を発見している。発見された経筒および伴出した銭貨12枚については、赤坂直忠・山本寿々雄両氏によって報告されている¹¹。報告によれば、経筒は金銅製筒で高さ9.84センチ、蓋は4.65センチ、筒の径4.5センチであるという。円筒形全体の拓影を載せている。拓影の銘文は次のとおりである。

「羅刹女」甲寅住呂中村「奉納大乘妙典六十六部聖」三十番神「天文二十一年今月」

以後、上藏原経塚については赤坂・山本両氏の報告が基本となってきた。関秀雄氏¹²や出代¹³が用いたのがそれである。

1985年出代の踏査したところ、中村氏宅の西側に南北に走る尾根があり、その一角に経塚があったとされるが、その痕跡は認められなかった。また、経筒、銭貨の所在も不明であった。なお、経塚の存在した近くにも東西と南北にL字状にのびた土壠がみられた。これについては、「山梨県の中世城館跡」（山梨県教育委員会1986）の中で、上藏原の土壠として報告されており、中世末期の土壠層との関係が指摘され、注目されるところである。

さらに、経塚とはわずかな位置に中村家の旧墓地があり、宝鏡印塔、五輪塔、石祀などが見られる。宝鏡印塔の一基には次のような銘文が刻まれている。

意趣者「逆修功德主」授林道傳信男「現世安禱後世」普處子孫繁昌「口苦受樂者也」永祿十二年三月時正」

また、五輪塔の一基にも永祿12年（1569）在銘で授林道傳の名が見える。いずれも永祿12年の春に供養された逆修塔である。授林道傳については、「武田家過去帳」から逸見藏原中村右近示であることが知られる。弘治2年（1556）4月21日と永祿7年（1564）3月21日に見える。

1994年長期にわたって不明であった経筒と銭貨の所在が判明した。中村芳夫氏宅において実見する機会を得て実測などを行うことができた。銅板製鍍金の経筒は保存状況も良好であった。蓋は無錫の被蓋式盛蓋である。蓋と筒身内側に紙本経の残片が付着しているのが認められた。銭貨については11枚であった。

③塔の越経塚 北巨摩郡双葉町下今井

中央線の塩崎駅から東方約500メートル、台地山林中の西南斜面にある。経塚の形状がある程度残されている例である。飯島進氏¹⁴や三宅敏之氏¹⁵によって紹介されている。三宅氏によれば、遺構については「大半破壊されているが、雜木林の中に封土の一部や削石が残存しており、それから察すると、経約3メートル、高さは斜面の低い方から測って約1.5メートル、高い方では約50センチ内外になる円形封土を築き、その上を20~30センチの石で葺いた塚であった。」と報告されている。

出土品については、永祿4年（1561）在銘経筒と当年（16世紀）在銘経筒、銭貨138枚、紙本経の残片などである。経筒は円筒形が高さ10センチで銅板製鍍金である。一部分を欠損して

おり、銘文で不明の部分がある。銘文は次のとおりである。

「十羅刹女」 摂津國之住清覺 奉納大口□□六口六部□ 三十番神 永祿六年今月吉日

六角宝輪形の高さは13.3センチで銅板製鍍金である。銘文は次のとおりである。

「十羅刹女」 肥前國住照白 奉納大乘妙典六十六部 壇 三十番神 当年今月吉日

④円乗寺経筒 東八代郡中道町右左口

真言宗智山派の七覚山円乗寺は、金剛智院菩勝坊ともいい五社権現の別当寺であった。役小角の開創寺伝があり、延慶2年(1309)の胎内銘のある役行者像が安置されている。開創後の展開は未詳であるが、中世の文献に寺名が散見される。「巡回雜記」文明19年(1487)2月条には、本山派修驗聖護院道興が当宿し、觀桜の宴を催したことが見え、「土代記」永正13年(1516)9月8日には、駿河今川勢の侵入によって堂宇が焼亡したとある。また、永祿2年(1559)9月、武田信玄から菩勝坊の坊領が安堵されたことが「円乗寺文書」(『甲州古文書』)から知られる。さらに、「八幡神社文書」(『甲州古文書』)永祿4年(1561)の武田氏番帳に見える42番の「七かくの権宜」である。

武田氏滅亡後は、徳川氏から守領を安堵され、文化年間(1804~17)には御朱印寺領29石5斗余で境内1万2062坪及び山林を相伝している。明治11年(1878)堂宇を焼失したが、大正6年(1917)に本堂が再建された。また、五社権現は明治の神仏分離政策により五社神社となる。1985年円乗寺住職の北守順真氏より、伝世されていた小形経筒を拝見する機会を得た。元亀2年(1571)在銘の経筒は、六角宝輪形経筒で、銅板製鍍金である。高さ14.3センチであり、3面に次のとおり銘文が刻まれている。

「十羅刹女」下總住人圓金坊 奉納經王六十六部 三十番神 元亀二年今月日

なお、経筒の内部に偏平五輪塔形泥塔が納められていた。高さは8.5センチであり、両面には型押による5つの梵字が各輪に配されている。これらの経筒と泥塔については、すでに田代¹⁰が報告したところである。

円乗寺と伝世経筒との関係を知ることができるものとして、文化年間の『甲斐国志』仏寺部に円乗寺の六角堂について注目される記述がある。「行者堂ノ北ニ在リ回国修行ノ者納経所ナリ納経ノ式慶長三年ノ記アリ堂内ニ回国者所元祖賴朝坊ノ石塔婆ヲ安ズ賴朝ノ事碑説アリ今略シテ不記」とあり、六角堂が回国納経所であったことが理解される。現在、六角堂は円乗寺から南西約500メートルの五社神社裏手の山頂にある。明治26年(1893)に再建された六角堂も倒壊し、六角形の基壇とその中央に宝篋印塔を残すのみである。

3 社寺奉納経筒と埋納経筒

山梨の中世経塚4例について見てきた。納経にあたって、大六塚・上藏原経塚・塔の越経塚のように塚を築き、小形経筒に経典を納めて埋納する例と、円乗寺経筒のように社寺へ経筒を直接奉納する例が知られた。これらの異なる納経のあり方について検討を行ってみたい。

六十六部聖の活動は、本来1團に1カ所、全国66カ団を回遊するとされているが、その巡拜路はある程度一定の社寺が決まっていたとも考えられるのである。下總国の圓金坊が元亀2年

(1571) 在銘の経筒を奉納した円楽寺は、中世における甲斐国納経所であったことが知られる。文化11年(1814)完成の『甲斐国志』は、円楽寺が「回國修行ノ者納経所」であり、慶長3年(1598)の納経の式に関する記録があることを伝えている。

近世において圓楽寺が回國納経の巡拝路の1カ所であったことは、天野信景の『塩尻』に収められた「六十六部聖順拝路」によってもそのことが知られる。宝永4年(1707)に東武の旭春が刊行したものであり、1国1社寺で66ヶ国を載せており、その中に「甲州七覚山」とある。同じく18世紀前半頃の刊行と考えられるものに、下野国河内郡新里村の念西の『回國六十六部縁起』があり、その中に「かひの国しちかくさん」と見られる。なお、『塩尻』の巡拝路とは20ヶ所が別の社寺であり、回國の聖によって巡拝路が異なることも知られる。

さらに、山梨県東八代郡中道町右左口の千野満平氏宅には、正徳3年(1713)から享保3年(1718)にかけて、千野忠右衛門が六十六部の回國を実行したおりの納経請取状164通が残されている。甲斐国では「甲州山梨郡淨土教寺」「甲州七覚山大権現宮圓楽寺」「甲斐国・宮浅間神社」「甲州國分寺」を巡拝している。忠右衛門の納経社寺の中で、「塩尻」所収の社寺と一致するのは43ヶ所ある。忠右衛門の納経は、多くが1国に數カ所であり、有名な靈場ができるだけ回っているといえよう。『塩尻』には「秩父板東一百番、八十八箇所より、西国三十三所、四国遍路四十八箇所ニ、六十六部を一つにして、回るもの多し」とあるように、忠右衛門も大願成就のためにより多くの社寺に立寄ったのである。忠右衛門の5年におよぶ回國納経の動機の1つに、地元にある回國納経所としての七覚山圓楽寺が大きく影響していたことであろう。

『甲斐国志』、『塩尻』、『回國六十六部縁起』、『千野家納経帳』などから、近世において回國納経所であった圓楽寺を見てきた。圓楽寺に奉納された元龟2年在銘の中世の経筒に聞わって、大分県の『余瀬家文書』がある。文書の1通に16世紀後半とされる「六十六部奉納札所覚書」があり、その中に「甲斐・横根・七覚寺」と見える。甲斐国に2カ所の奉納所が存在したことが知られる。「横根」は甲府市横根町の岩泉山光福寺とされる。光福寺は「寺記」によれば、後三年の役(1083~87)後、源義光が空源を開山として真言宗の寂靜院を建立したのが初めという。鎌倉時代には横根寺と俗称されていたが、南北朝期の応安5年(1372)の山崩れで荒廃していたのを、天文16年(1547)武田信玄が淨土宗寺院光福寺として再興したといわれている。江戸時代は上の堂に行基作と伝える十一面觀音、下の堂には空海作と伝える聖觀音が安置され、横根穴觀音と呼ばれていた。横根(光福寺)が回國納経所として見えるのは、『余瀬家文書』のみである。光福寺の回國納経所としての性格は近世にはいってから弱まり、地域的な觀音靈場として発展したのであろうか。七覚山圓楽寺が近世はもとより中世まで遡って、六十六部壇による回國納経所であったことが文献によって知られた。元龟2年の奉納経筒の存在はそのことを示しているといえよう。

先にも述べたように、中世の小形経筒の発見地は110数カ所であるが、そのうち六十六部壇による奉納経筒の発見場所は少ない。『余瀬家文書』に見える社寺にあてると、甲斐国の七覚寺、下野国の日光山、加賀国の白山、越中国の立山、出雲国の大社の5カ所である。『塩尻』では『余瀬家文書』の5カ所に、岩見沢の八幡が加えられる。66ヶ所の靈場に対して6カ所に

過ぎない。六十六部聖の一般的な巡拝路となっている社寺との差はきわめて大きい。この開きについては、かつて66ヶ所の全てに経筒が奉納されたものが、次第に失われてしまった結果を示しているのであろうか。岩見岡八幡（島根県大田市南八幡宮）の六角堂内に鉄塔があり、この鉄塔内から経筒168点、銅製納札7枚、その他泥塔、経石懸仏、錢貨などが発見されている。この保存状態が恵まれていた例などから、巡拝社寺の全てに経筒を奉納したとは考えにくく、回國納経に際しての方法の違いをうかがうことができる。経筒の奉納以外に、南八幡宮の鉄塔内にあった納札の奉納や、写経のみを奉納した場合も考えられるのである。

次に塚を塗いて経筒を埋納した例である。大六塚、上藏原経塚、塔の越経塚の3例は、北巨摩地方に分布し、先に見たように六十六部聖の巡拝路とは直接に関連するとは考えられない場所である。それぞれの経塚の立地は村中の辻や墓地の近くや山林などであるが、かつては地域的な靈地であったことも考えられるが、明らかではない。

塔の越経塚の永祿4年在銘経筒には、浜津国の大覺という聖の名があり、当年在銘経筒には、肥前国の照白という聖の名がある。1基の経塚から2点の経筒が出土し、しかも同国聖の出身地が異なることは注目されることである。各國を巡って甲斐国にやってきた清覺や照白は、円乗寺に納経を済ませた後、各地で法華経信仰を勧めていたところ、双葉町下今井の地において、地元の有力者の依頼に応じて経塚を共同で営んだのであろうか。

大六塚は蘿崎市大草町上条東側に所在したが、この地は甘利莊と呼ばれる地域であり、そのことは永正18年在銘経筒の「甲斐甘利莊」とあることによっても知られる。大六塚の造営は、甘利の住人で六十六部聖の顕興が関与している。また、上藏原経塚は高根町藏原に所在し、天文21年在銘経筒が出土しているが、その銘文に「甲斐住呂中村」と見える。経塚造営にあたって甲斐國の住人である六十六部聖の中村が関わっていることが知られる。これらのことから六十六部聖の活動が、日頃は地元や国内にその中心があり、時々の依頼で諸国を回國したと考えられるのである。

甲斐國の六十六部聖が同國を行っていたことは、現在までに各地で発見された経筒から知ることができる。鳥根県の大出南八幡宮の鉄塔内の経筒は、永正18年(1521)、大永5年(1525)、大永7年(1527)、天文5年(1536)の紀年銘のあるものが5点と年不詳が1点である。それぞれ「甲斐巨麻郡甘利莊」、「甲斐巨麻郡加賀美」、「甲斐府中」、「甲斐」、「甲斐」、「甲州黒國」とあり、国だけのものから郡や村まで明確なものもある。和歌山県那智山経塚の大永2年(1522)在銘経筒は、奉納者は「甲斐甘利莊」の聖で、依頼者は「駿州府中烏坂」の又四郎定重である。茨城県嘉良寺里経塚の大永3年(1523)在銘経筒には「甲斐高家」とあり、福島県下上野経塚の年不詳の経筒には「甲斐」とある。東京都成瀬経塚の年不詳の経筒にも「甲州」と見える。これらのことから、甲斐國の六十六部聖も東国や西國の靈場はもとより、きめ細かく各地をめぐっていることが知られるのである。

なお、上藏原経塚の造営者についてふれておきたい。戦国期の藏原の一帯は武田家臣団のうち、辺境武士団として編成された津金衆に関わる地域である。津金衆は津金氏のほか小尾、比志、小池、箕輪、八巻などの諸氏からなっていた。藏原は南北に走る尾根を1つ挟んで小池と

隣りあう位置にある。藏原地区でも最も北に位置するのが上藏原であり、その一角に所在した上藏原経塚は、先に紹介したように土星跡や中村家旧墓地との関係から中世土豪層との関わりが考えられるのである。

中村家旧墓地の永祿12年（1569）の宝篋印塔にある「授林道傳」が、「武田家過去帳」の中に「逸見藏原中村右近丞 授林道傳禪門 逆修 弘治二年四月廿一日」とあり、さらに、「甲州逸見藏原中村右近丞内方 荣富妙繁信女 逆修 永祿七年甲子三月廿一日」とあることから、宝篋印塔が中村右近丞の逆修塔であることが知られる。

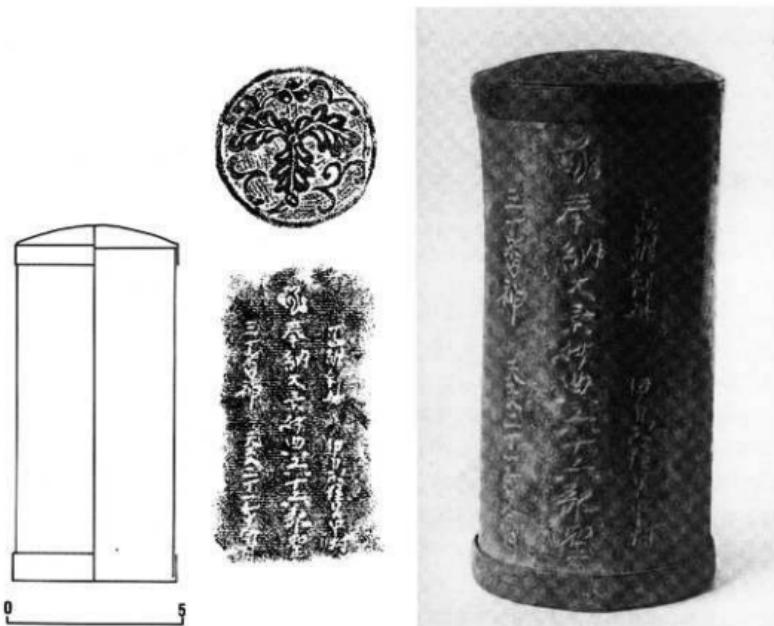
のことから上藏原経塚は、津金衆の小池党に関わる有力な人物か、ないし藏原にあって小池氏にも相当する有力な人物であったと思われる中村右近丞によって、その屋敷地内的一角と考えられる場所に営まれたのであろう。その造営に六十六部聖として関与したのが「甲州住侶中村」である。この聖については中村右近丞の縁者の可能性を考えておきたい。

以上、16世紀後半の六十六部聖の経筒を用いた納経について、社寺へ奉納した例と、塚を榮いて埋納した例とに分けて若干の検討を行ってみたところである。16世紀後半は戦国期の動乱の社会であるが、六十六部聖の活動はきわめて広範囲で多様な面を持っていたことが知られた。法華經信仰を勧める六十六部聖は、日常にはその出身地域および国内にあって活動を行い、また、積極的な勧説を行ったであろうが、依頼を受けて巡回納経へと出ていったのである。

六十六部聖が背負う笈の中には、金色に輝く小形経筒をはじめ、納札や写経の道具が收められていたことであろう。諸国の巡拝地においては納経の方法も使い分けていると考えられるのである。中世における一定の巡拝路を中心としながらも、各地においても、求めに応じて納経の1つの方法として、経塚造営も行ったのである。

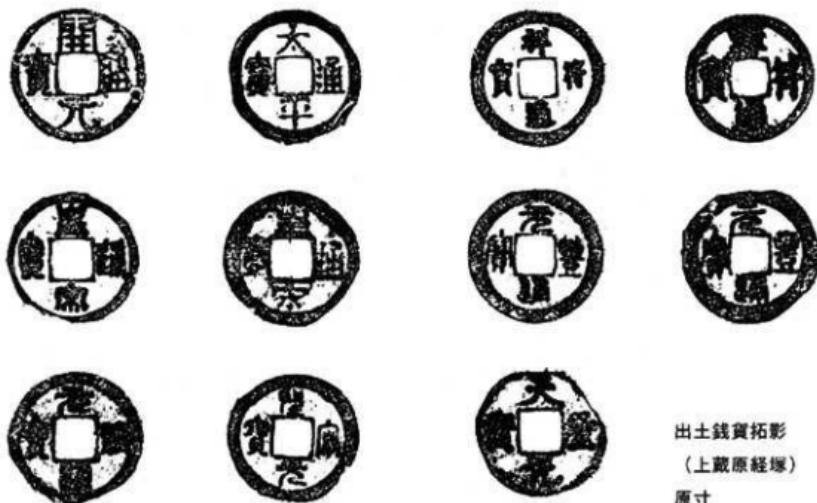
註

- 1) 赤星直忠・山本寿々雄「山梨県北巨摩郡高根村出土の葡萄唐草文のある経筒について」
『県立富士国立公園博物館研究報告』1 1960
- 2) 関 秀夫「経塚遺物の紀年銘文集成」『東京国立博物館紀要』第15号 1980
- 3) 田代 孝「七覚山円乗寺の経筒と巡回納経」『山梨考古学論集I』 1986
- 4) 飯島 蓬「甲斐国北巨摩郡双葉町塔の越出土の経筒」『甲斐考古』1 1966
- 5) 三宅敏之「塔の越経塚－巡回納経に伴う一例として－」『甲斐考古』5-2 1968
- 6) 註3)と同じ。



円筒形経筒実測図 拓影（上戸原經塚）

円筒形経筒（上戸原經筒）



出土錢貨拓影
(上戸原經塚)
原寸



六角形經筒（塔の越經塚）



円筒形經筒（塔の越經塚）



六角形經筒（円乗寺）



円筒形經筒（大六塚）

近世軒平瓦の分類について —甲府城を例にして—

柏木秀俊

-
- | | |
|-----------|--------------------|
| 1 はじめに | 4 発掘調査で得られた軒平瓦のデータ |
| 2 平府城の歴史 | 5 考察 |
| 3 軒平瓦分類試案 | 6 おわりに |
-

1 はじめに

近年全国各地で近世城郭の発掘調査が盛んに行われている。その調査で出土する遺物の大半が瓦であろう。しかし、その瓦も縄文土器のような編年が確立しておらないため、時期決定をする参考資料にはなりにくく、瓦落多として扱われるがちで、わずかに瓦や鬼瓦などその形状に特徴のあるものに目をむける程度である。この程、織豊期城郭研究会より『織豊期城郭の瓦』が刊行された¹⁾。織豊期に築城期をもとめられる全国の城郭調査資料をもとに、それらの瓦を網羅したもので、分類や編年方法に多くの視座を示している。もちろん甲府城も織豊期に築城されたものだが、この時期の瓦の出土量は相対的に少なく、むしろ江戸時代に入ってからのものがその大部分を占める。そこで今回は出土量も多く、文様の種類も豊富な軒平瓦に着目し、なおかつ時間軸を江戸時代に限定し、上記の雑誌に示された分類・編年観をもとに分類を試みた。

2 甲府城の歴史

(1) 城主の変遷

甲府城が築城された場所は、一条小山と呼ばれた東西200m、比高差30m程の独立した安山岩の山であり、中世には時宗の名刹である一蓮寺があった。本能寺の変後、甲斐を領有したのは徳川家康だが、後北条氏滅亡後の家康の関東移封に伴い、甲斐は豊臣秀吉により領有されることとなる。そうした状況下、甲斐は秀吉にとって対家康の拠点ともいうべき重要性を持たされたのである。その結果、秀吉に近い人物として羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長父子らが城主として次々と甲府に入城してきた。しかし、慶長5年(1600)関ヶ原の戦い後、浅野氏は和歌山に移封され、甲府は再び徳川領となる。甲府を江戸防衛の要として重要視した江戸幕府は、徳川家康の九男の徳川義直(後に尾張藩主)、2代將軍秀忠の子忠長、3代將軍家光の子綱重とその子綱豈(後の6代將軍)を次々と甲府城主にしていった。宝永元年(1704)からは、甲斐出身で5代將軍の側用人であった拂沢吉保、その子吉胤が甲斐國の内15万余石を拝領した。しかし、享保9年(1724)には再び幕府直轄地となり、明治維新を迎えた。このように甲府城は豊臣政権・江戸幕府にとって重要な拠点であった。

(2) 築城と修築

甲府城を本格的に築城したのは、加藤光泰が城主になった天正19年(1591)からである。

「天正十八寅年豈臣少将封ヲ本州ニ受ケ、明年加藤遂江守光泰代ル、是ニ於テ修築之功ヲ與ス、一条ノ旧記ニ平岩七之助城代ノ頃ニ寺ヲ遷ス可キ地ヲ屬リ、加藤之時ニ及テ寺ヲ遷ス由記セリ」（『甲斐国志』提要部府治）³¹とあることから、光泰が家康の基本計画に沿って一進守を移し、築城を進めたことがわかる。さらに文禄の役で渡済した光泰は文禄2年（1593）、留守居の家老にあてた書状で「其の國ふしん、土手、ひかしの丸、石かき出来候や。此の表事、上様御存分に申付候。帰國仕り、城をやかて見可申候。（略）」（『大州加藤文書』）³²とあり、陣中でも築城に対する姿勢が積極的であったことを窺わせる。光泰はこの後陣中で没し、代わった浅野長政・幸長父子の手により慶長5年（1600）の岡ヶ原の戦いまでの間に、ほぼ築城は終了したであろう。浅野氏移封後、入城した平岩親吉の時に「甲州ニ新タニ府之城ヲ築キテ、之ニ居スル」（『甲斐国志』人物部第九平岩主計頭親吉）³³とあることからもわかる。この後、甲府城に大修築の手が入るのは綱重の時である。築城後50余年の歳月が過ぎ、甲府城の破損も目立ってきたという。「寛文四年二月廿七日、甲府御城地、御普請町成サ被可キ山、被仰渡サ、之レニ依リ御普請料、御金武万両、之レヲ進メ被ル之由、仰セ渡サ被ル也。

四月十三日、出雲守、南宮十兵衛同道ニ而登城、是ハ甲府御城之絵図十兵衛持參、御城破損以下之義、御老中え何ハ被可キ為メ也。

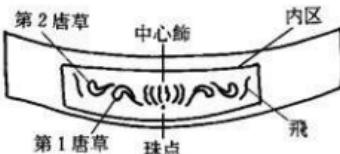
閏五月廿一日、知足院え淡路守方より切紙を造ハス、甲府御城之柱立、吉辰御覧候而給フ可キ之由也。

十月十二日、山口山雲守、甲府御城普請遷ハサ被ル見分ノ為メ云々。

十一月廿一日、甲府御城、御普請出来ニ付、諸奉行御目見、下サ被物ノ次第、呉服二兩宮十兵衛、銀三十枚小長谷猪左衛門、白雀一、箱入樋井楠竹川監物、云々」（『甲府日記』寛文四年条）³⁴ 寛文4年（1664）に幕府から修理費として2万両を支出させ、およそ半年間で修築をおこなった。次に記録で見ることができる修築は、宝永3年（1706）柳沢吉保の時代になってからであった。「城ノ端門由り入ル、隙塹深ク広ク、右壁峻時、敵臺堆疊壯麗言フ可カラズ、相顯ミテ曰ク、小都城ト謂フ可キ也、唯ダ樓上ニ曳尾無シ、之ヲ訊ヘバ則チ云フ、古來ヨリ此ノ如シト、何ニ謂レカヲ知ラズ、（中略）内城惣テ十一、曰ク樂屋曲輪、曰ク屋形曲輪、曰ク台所曲輪、曰ク稻荷曲輪、曰ク鍛冶曲輪、曰ク數寄屋曲輪、曰ク清水曲輪、曰ク帶曲輪、曰ク天守曲輪、曰ク二ノ丸、曰ク本丸、（後略）」（『風流使者記』）³⁵ 萩生徂徠が宝永3年（1706）9月10日に使命を奉じて、甲府城に登った時の記述である。甲府城に対する感想を「壯麗」だけでは物足りず、「小都城」という表現まで用いている。また、内城の曲輪名を列挙するなど柳沢吉保の時代に現在の甲府城の姿がほぼ完成していると見てよいだろう。享保9年（1724）柳沢吉里が大和郡山に移封されるのに伴い、甲府に勤番制がしかれたが、明治維新までの間（慶応2年（1866）に勤番制が廃止され、城代が置かれるが）、享保12年（1727）には甲府城が大火に見舞われても、史料に残るような大規模な修築は確認されていない。

3 軒平瓦分類試案

古代瓦中心の研究がなされていく今日、近世瓦の名称、あるいは瓦各部の呼称はその研究者



第1図 軒平瓦各部呼称

によって表現が異なる場合があった。本稿では次のように呼称することとする¹⁾。

分類をすすめていく前に、甲府城で出土している軒平瓦の概略について少し触れておく。均整唐草文の形態をとり、中心飾が3葉、あるいは5葉で第1唐草、第2唐草の存在が確認でき、飛は存在しない軒平瓦は、金箔の施されている蟻瓦・鬼瓦類などとほぼ同一の層で数多く確認されてきた(第2図-1・2)。また織豊期城郭研究会の木戸雅寿氏がすすめる、織豊期瓦の分類・編年などと比較した上でも近似する部分が多く確認でき、甲府城築城期のものと確定できる。次に棟瓦である。棟瓦は、本瓦葺の平瓦と丸瓦を1つにまとめたもので延宝2年(1674)近江三井寺に出入りの瓦工であった、西村平兵衛の発明によるものである²⁾。甲府城で確認される棟瓦は中心飾、唐草文も多種多様にわたっている(第2図-3・4・5・6)。また、その表面には雲母粉(キラコ)³⁾が大量に付着していることも認められる。これら棟瓦は、発明された時期が甲府城築城から80余年たっていることから、先に触れた中心飾が3葉・5葉の軒平瓦よりは、新しいことはわかる。

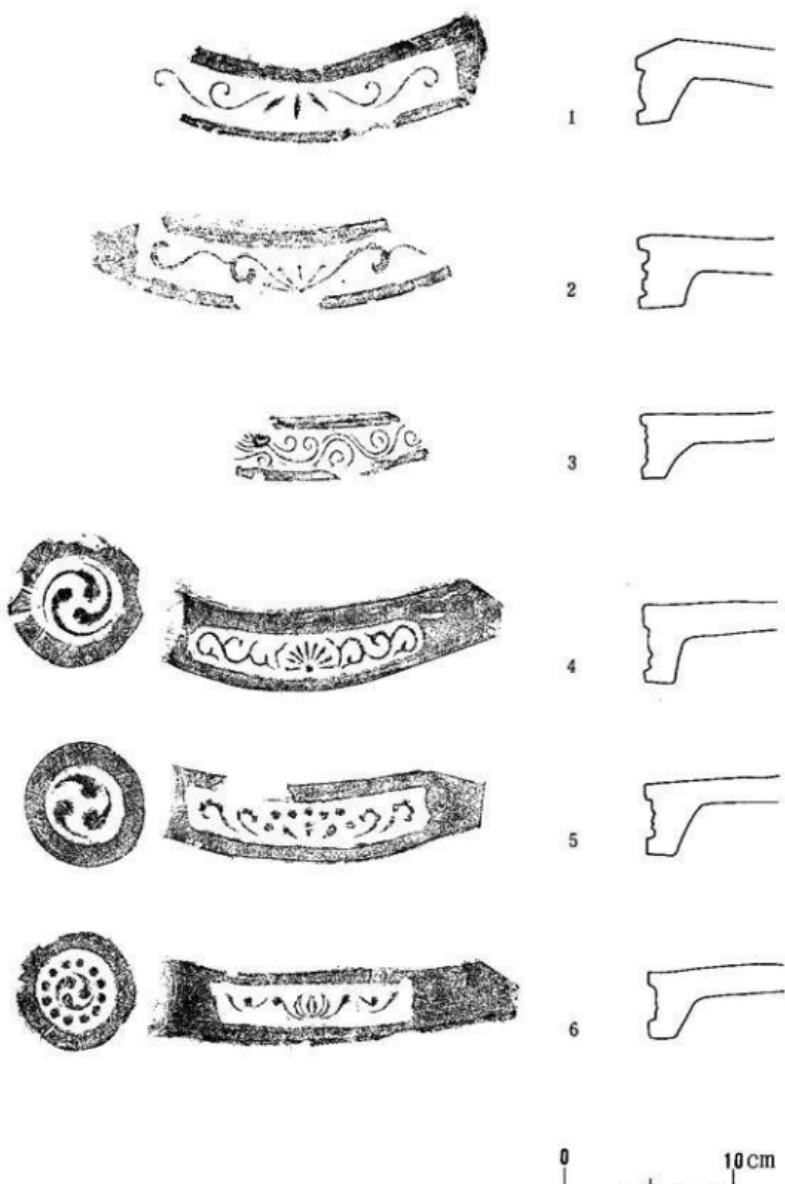
今回分類する軒平瓦は、上記以外のものである。均整唐草文の形態をとるものの中、さらに第1唐草・第2唐草の表現方法に着目した結果、2重線により表現されているものが数多くある。これを「2重唐草文」と呼称する。甲府城の調査では、軒平瓦全体で4239点も確認した。5年近くの発掘調査で取りあげた瓦の総量は、現在まで200tを越える。2重唐草文瓦は、4239点の内1530点を数え、総数の36.1%を占める。この数字は興味深い。築城期の3葉・5葉、その他の本瓦、棟瓦でも2重唐草文以外のものなど文様で見ていくと、かなりの数になる。しかし、そうした瓦と比較しても2重唐草文の出土量は圧倒的に多い。この相対的な多さから、2重唐草文に時期、あるいは地域的な特色の存在を推測することができる。ここでは、この2重唐草文を有する軒平瓦の分類を試みる。

<2重唐草文分類試案>

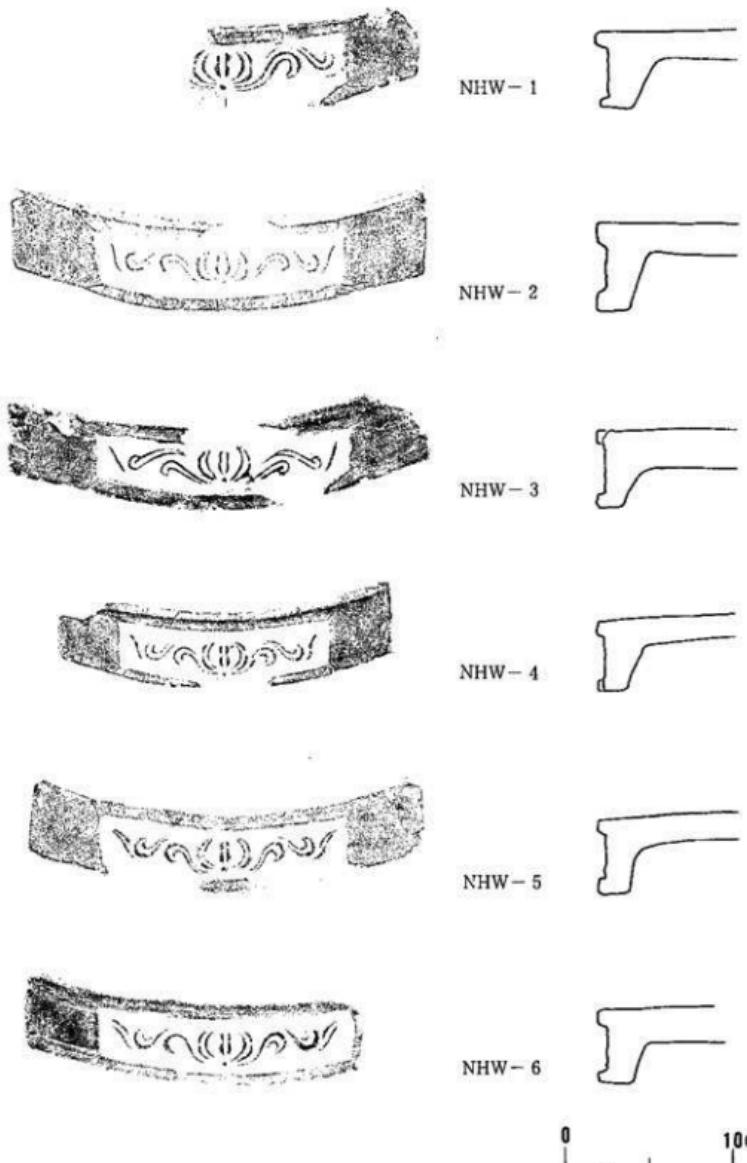
2重唐草文を分類していく目安としては、次に列挙する通りである。

- 1 中心飾が2重であること。
- 2 第1唐草・第2唐草の形状の差。
- 3 飛の有無、形状の差。
- 4 内区の様の大小。
- 5 雲母粉(キラコ)がないこと。

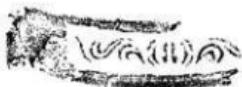
以上の点に留意して分類をすすめていくと12種類になり、表記上N(軒) H(平) W(2重)とする⁴⁾。



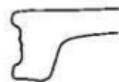
第2図 軒平瓦・棟瓦型式一覧



第3図 2重唐草文型式一覧(1)



NHW-7



NHW-8



NHW-9



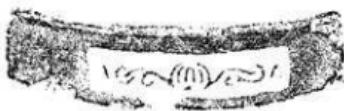
NHW-10A



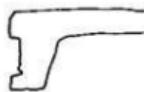
NHW-10B



NHW-11



NHW-12



第4図 2重唐草文型式一覧(2)

NHW-1 (第3図) 第1唐草の2重線が中心飾の下部から発生する。第2唐草は第1唐草上部より発生する。第1・第2唐草共に長い。飛は第2唐草の下部からほぼ直横に向かって1本出る。内区の縦は約2.5cm。

NHW-2 (第3図) 第1唐草は1本が中心飾の下部から発生し、途中から2重線となる。第2唐草は第1唐草とは重ならない。飛は縦に1本。内区の縦は約2.5cm。

NHW-3 (第3図) 第1・第2唐草共に丸みが少なく、直線的になる。飛は短かく縦に1本。内区の縦は約2.5cm。

NHW-4 (第3図) 第1・第2唐草共にNHW-2の形状に似る。飛は縦に1本だが、1ヶ所くびれる。内区の縦は約2.5cm。

NHW-5 (第3図) 第1・第2唐草共にNHW-2の形状に似る。飛が縦に2本、内側の方が短い。内区の縦は約2.5cm。

NHW-6 (第3図) 第1・第2唐草共に巻き込みの内側の線が極めて短い。飛は縦に2本、内側の方が短い。NHW-5に似る。内区の縦は約2.5cm。

NHW-7 (第3図) 中心飾下部の珠点がない。第1唐草は中心飾脇から1本出る。途中から枝分かれし、2重線となる。第2唐草は第1唐草上部から発生する。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

NHW-8 (第4図) 第1・第2唐草共にNHW-1に似る。ただし、第2唐草の1本は第1唐草の巻き込みより外側から発生する。飛はない。内区の縦約2cm。

NHW-9 (第4図) 第1・第2唐草共に巻き込みが球体になり、唐草は直線的になる。NHW-3に似る。ただし、第2唐草の1本が中心飾脇から発生する。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

NHW-10A (第4図) 中心飾が上に向って開く。唐草についてはNHW-2に似る。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

NHW-10B (第4図) 中心飾は開かず。それ以外はNHW-10Aと同じ。

NHW-11 (第4図) 中心飾、唐草共にNHW-10に似る。ただし、どちらも作り方が粗雑になっている。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

NHW-12 (第4図) 中心飾は内側に閉じ、球体のように見える。唐草は2重唐草のどれとも似ない。第1・第2唐草の明確な区別が難しい。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

注) NHW-10については中心飾の開き・閉じが確認されるのでそれぞれ10A・10Bとする。それ以外の2重唐草文については中心飾の開き・閉じは確認できなかった。

4 発掘調査で得られた軒平瓦のデータ

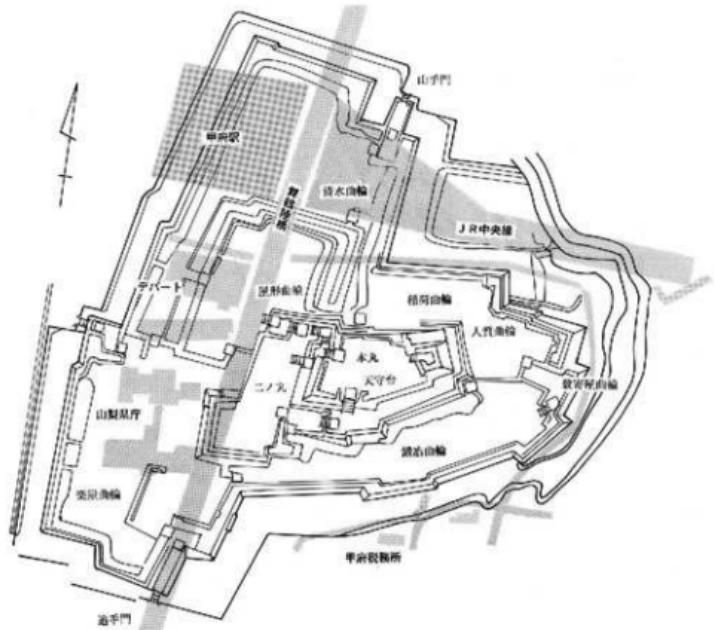
(1) 分類別出土地別データ

2重唐草文の出土点数は、総数で1530点を数えるが、12分類の内、最も多いのがNHW-10であり、29.7%にのぼる。その次にくるのがNHW-2の15.8%、NHW-11の15.4%、NHW-

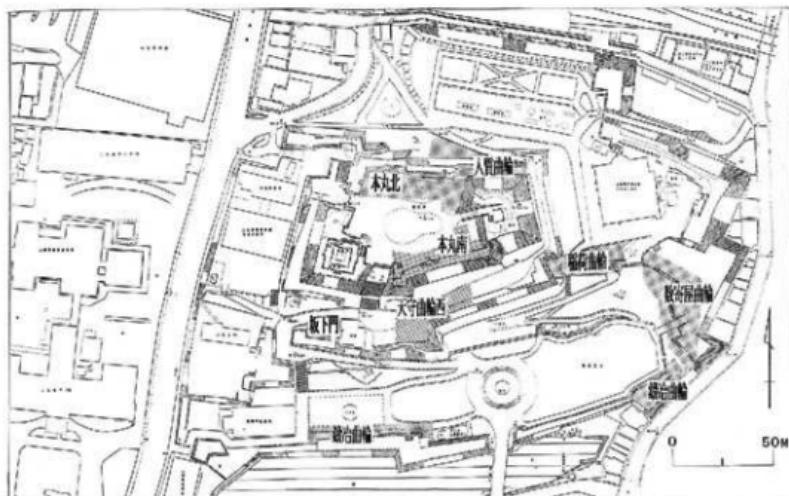
3の10.2%である。それ以外は、軒並み1ヶタ台におさまっている。分類の基準となる条件を見ていくと、NHW-10・2・11は内区が2.5か2cmの違いが認められるが第1・2層草、飛、中心飾についてはかなり似通っている。また、NHW-3・9についても同様のことがいえる。これらのことから推測するに、2重唐草文の中でもNHW-2・10・11系とNHW-3・9系の2つのグループが存在する。出土地別に見ていくと、特定の瓦が1ヶ所に集中しているわけでもなく、ほぼまんべんに出土している。このことは、2重唐草文がある特定の建物に使用されたわけではなく、甲府城全城の建物に使用されたと見るべきであろう。ただし、各出土地の総数を見てもわかるように総数の中で、ばらつきがある。このことは、調査区面積の大小、瓦溜の有無という差によるものである。ただNHW-10のみが各出土地で30%前後の率を残していることに注意しておきたい。

(2) 層位的データ

ここでは人質曲輪北ド¹⁰で設定した2カ所のトレンチで層位的に2重唐草文の出土状況を見ていく。人質曲輪北下の性格であるが、天守台下に存在する人質曲輪、及び木丸櫓の北側に位置し、平成2・3年次の調査においては、鬼瓦・鰐瓦・五三の桐鬼板瓦・飾り瓦など約50点の金箔瓦類を確認した場所である。また、これら金箔瓦類も層位的に確認することができるので瓦の新旧関係をつかむのに適した場所であるといえる。ここでは2カ所のトレンチをA・Bとし、トレンチAのデータを表3、トレンチBのデータを表4にあらわす。また表3のA~D層と表4のa~f層は位置的にはほとんど差がないので、同様のものと見なすことにする。表3・4共に金箔瓦層はD層・f層に該当する。表3の場合、2重唐草文が軒平瓦総数の中で占める割合は28%であるが、D層はこの数値を下回っている。表4の場合、2重唐草文が軒平瓦総数の中で占める割合は16.4%と表3に比べるとその比率が下がるが、金箔瓦層にあたるf層に2重唐草文が1点も含まれていない。各層は瓦層であるため、瓦の大量廃棄の時に形成されたものと見なすことができる。次に各層を見ていくと表3の場合、B層・D層に2重唐草文が多く出土し、なおかつNHW-2・10・11とNHW-3・9に集中する。分類別出土地別データの項でも述べたように、唐草の形態からこの2つのグループは存在することは明らかである。NHW-2・10・11のグループの場合、D層にNHW-2・10が多く、B層でNHW-11が急増する。またNHW-3・9のグループの場合、D層よりB層のほうが多い。表4の場合、b層・d層の出土量が多く、NHW-2・10・11のグループではd層にNHW-2が多く、b層でNHW-10が増える。NHW-3・9のグループでは、d層よりb層のほうが多い。この表3・4にあらわれる傾向の共通項を見ると、NHW-2・10・11グループのほうがNHW-3・9よりも古く、グループの中でもNHW-2・10のほうがNHW-11より古いと言えそうである。また具体的な時期は、築城期に使用されていたと思われる金箔瓦が数多く存在する層に2重唐草文が少ない（あるいはほとんどない）ことから、2重唐草文が使用された時期が築城期以降、江戸時代に入ってからと推測できるのではないだろうか。また、表3・4共に12分類の内NHW-2・3・10・11が出土量のほとんどを占め、ここでも出土地別のデータと同様のデータと



第5図 甲府城市街化図



第6図 2重唐草文出土位置図



第7図 瓦葺建築物位置図

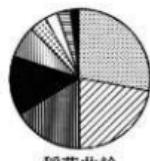
箇所番号	瓦葺屋面積	天井面積	入戸面積	人戸間隔	廊下面積	窓面積	床面積	壁面積	その他	合計
NIIW-1	0	0	1	2.3%	0	0	0	0	0	1.2
	0	0	0.8%	2.3%	0	0	0.1%	0	1.8%	0
	0	0	0.8%	2.3%	0	0	0.1%	0	8.3%	0
NIIW-2	6	1.7	1.6	7.6	7.2	4.8	5.0	3	1.1	24.2
	4.3%	5.4%	12.4%	35.0%	8.1%	17.1%	1.7%	1.0%	17.7%	22.6%
	2.5%	7.5	6.6%	6.6%	2.9	6.1%	2.0	1.2%	4.5%	1.2%
NIIW-3	5	2.1	1.7	6.6	6.9%	5.3%	7.0%	6.7%	1.2	38.8
	3.8%	3.0%	17.6%	2.0%	2.0%	1.1%	1.4%	1.3%	0.1%	1.5%
	2.5%	1.9	1.0	0	0	0	0	0	0	4.1
NIIW-4	6	0.7%	1.9	7.8%	0	0.4%	2.1%	1.5%	0	1.8%
	2.1%	4.6%	3.8%	24.4%	0	2.3%	14.3%	0	2.4%	2.1%
NIIW-5	7	1.9	2.6	6.7%	6.7%	5.8%	7.8%	10.0%	0	30.0
	1.1%	6.1%	6.1%	9.3%	15.8%	1.7%	2.4%	3.2%	0	8.2%
	4	2.0	0	0	0	0	0	0	0	8.3
NIIW-6	4	0.4%	2.0	0	0	2.3%	7.5%	10.0%	0	0
	3.5%	6.4%	2	0	0	0	0	0	0	5.4%
	4.3%	2.4	1.2	0	0	0	0	0	0	2.8
NIIW-7	6	0.2%	5.1%	0	0	0	1.2%	0.5%	0	8.3%
	3.6%	57.1%	14.3%	0	0	0.1%	31.8%	0	0	1.8%
NIIW-8	6	0.1%	1.1	0	0	0	1.0%	0	0	2.3
	0	0.3%	0.8%	0	0	0	3.3%	0	0	0
	2.1%	0.6%	0.6%	0	0	0	3.3%	0	0	1.5%
NIIW-9	1	0	0	0	0	0	4.3%	0	0	1.12
	1.4%	3.2%	0	4.4%	5.4%	15.5%	5.5%	6.7%	4.8%	8.3%
	8.6%	0.8%	0	2%	7.8%	37.3%	18.6%	25.2%	1.1%	6.7%
NIIW-10	8	0.1%	3.9	1.6	0.8	7.4	8.8	8.1	2.17	4.9
	0.2%	3.1%	3.0	2.5	25.0%	33.0%	16.5%	22.2%	3.0%	3.3%
	0.7%	2.1%	8.6%	3.5%	0	1.6%	19.3%	2.4%	27.9%	26.7%
NIIW-11	2	0.7	0.7	0	0	3.8%	0	0	0	2.53
	2.2%	2.5%	20.8%	6.7%	9.3%	6.3%	4.4%	35.3%	32.8%	16.2%
	5.1%	3.4%	11.5%	1.3%	0.4%	0.1%	0.5%	4.3%	6.3%	0.8%
NIIW-12	2	0.1%	1.2	0	0	0	0	0	0	0.5
	2.8%	2.2%	0	2.2%	0	0	0	0	1.6%	0
	2.8%	2.2%	0	2.2%	0	0	0	0	1.6%	0
合計	133	312	129	45	232	281	284	39	62	12 153.0

A
B
C

A級 実数
B級 A級の実数/出土土地面積
C級 A級の実数/分類別面積

分類別面積の元は 分類別面積/2重古文書数

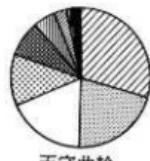
表1 2重唐草文分類別出土土地別集計表



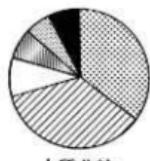
稲荷曲輪



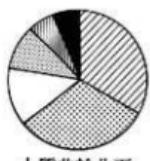
数寄屋曲輪



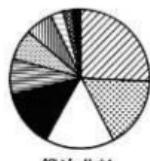
天守曲輪



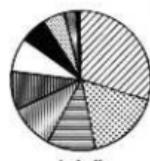
人質曲輪



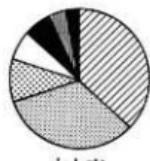
人質曲輪北下



銀治曲輪



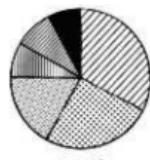
本丸北



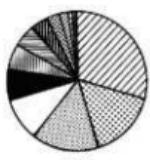
本丸南



坂下門



その他



合計

NHW-1

NHW-2

NHW-3

NHW-4

NHW-5

NHW-6

NHW-7

NHW-8

NHW-9

NHW-10

NHW-11

NHW-12

表2 2重堀草文出土土地別円グラフ

第8図 人質曲輪北トレンチ位置図

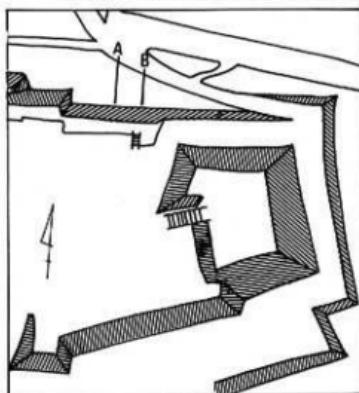


表3 2重唐草文相対表（トレンチA）

	A面	B面	C面	D面	合計
NHW-1	0	0	0	0	0
NHW-2	0	13	3	8	24
NHW-3	0	4	0	1	5
NHW-4	0	0	0	0	0
NHW-5	0	0	0	2	2
NHW-6	0	0	0	0	0
NHW-7	0	0	0	0	0
NHW-8	0	0	0	0	0
NHW-9	0	4	0	0	4
NHW-10	5	12	1	11	29
NHW-11	2	13	0	1	16
NHW-12	0	0	0	0	0
計 (a)	7	46	5	23	80
平均互数 (b)	1.9	11.4	1.4	13.8	28.5
n / s	25.8%	40.4%	28.5%	15.7%	25%

第9図 人質曲輪北トレンチA土層図

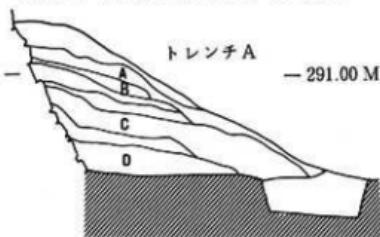
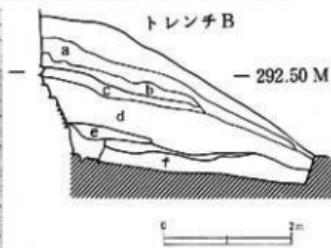


表4 2重唐草文相対表（トレンチB）

	a面	b面	c面	d面	e面	f面	合計
NHW-1	0	0	0	0	0	0	0
NHW-2	0	11	1	13	1	0	26
NHW-3	0	13	0	4	0	0	17
NHW-4	0	0	0	0	0	0	0
NHW-5	0	3	0	0	0	0	3
NHW-6	0	1	0	0	0	0	1
NHW-7	0	0	0	0	0	0	0
NHW-8	0	0	0	0	0	0	0
NHW-9	0	0	0	1	0	0	1
NHW-10	0	6	0	1	0	0	7
NHW-11	0	0	0	1	0	0	1
NHW-12	0	0	0	0	0	0	0
計 (a)	0	34	1	20	1	0	56
平均互数 (b)	1.9	8.4	1.3	4.6	3	1.77	34.2
n / s	0%	46.5%	7.8%	43.5%	33.3%	0%	16.4%

第10図 人質曲輪北トレンチB土層図



なっている。

(3) 胎土分析によるデータ

「甲府城II」の中で、河西学氏により甲府城出土瓦の胎土分析がおこなわれているⁱⁱⁱ。この分析では瓦胎土の岩石鉱物組成を中心に分類を行なっている。今回の2重唐草文の分類において胎土分析の中から、興味深いデータがあつたので改めて検証してみたい。第2図にあるA・A'は先にも触れたが、築城期に位置する均整唐草文の5葉・3葉の軒平瓦である。この2点をA・A'とする。第2図3~6は棟瓦でその表面には、大量の雲母粉(キラコ)が確認できる。この中の3をBとする。さらに今回分類している2重唐草文をCとする。これらA・A'・B・Cの胎土中の岩石鉱物組成は以下の表のようになる。

河西氏はこの分析の中で、A・A'・Cが同様の組成を示し、Bがやや異なるとしている。全体組成は砂粒子が3.9~31.6%であり、とくにBが少ない。赤褐色粒子は1~3.5%マトリックスは65~95.1%である。岩石鉱物組成はA・A'・Cは変質火山岩類(25.6~30.1%)・花崗岩類(15.6~22.2%)を主体に斜長石(17.1~23.2%)・石英(11.4~17.4%)・カリ長石・重

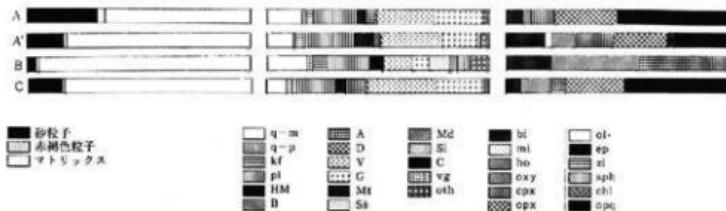


表5 軒平瓦岩石鉱物組成表(「甲府城II」山梨県教育委員会1992より引用)

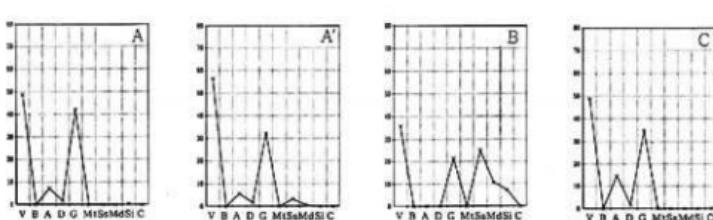


表6 軒平瓦岩石組成折れ線グラフ
(「甲府城II」山梨県教育委員会1992より引用)

鉱物・安山岩などを伴う。Bは斜長石（19.2%）・石英（20.5%）・カリ長石（2.3%）・重鉱物（6.4%）・変質火山岩類（12.8%）・花崗岩類（7.7%）・砂岩（9%）・泥岩（3.9%）などからなる。重鉱物組成は不透明鉱物（0～50%）・单斜輝石（7～40%）・斜方輝石（0～29%）・角閃石（4～40%）・黒雲母（7～20%）などから主に構成される。さらに河西氏は甲府盆地、八ヶ岳南麓周辺地域の河川砂との比較をおこない、A・A・Cが新第三系分布地域の河川堆積物と類似性が高いとし、Bについてはその度合いが高ないと前置きをし、塩川および荒川の河川砂との類似性を示している。これらのデータから2重唐草文が比較的新しい時期に使用された棟瓦より、築城期の瓦とその胎土において類似することはとても興味深い。

5 考察

今回の分類では、2重唐草文が12種類確認できたが、基本的にはNHW-2・10・11系とNHW-3・9系との2つが大きな柱となる。それ以外のものは、この2つの柱からの支流と見ていいいだろう。NHW-2・10・11あるいはNHW-3・9の差は、内区の縦が2cmか2.5cmというところに起因する。しかし、この差も厳密にとれば、さらに細分化することができるが、瓦の焼成の状況の違いで焼き締まりも異なってくることから、今回の分類の中ではこれ以上の細分化は試みなかった。5年間の発掘調査の中で、総数の36.1%を占める1530点という数の瓦が意味するものは何なのか。これまでのデータをもとに考察をしていきたい。出土別のデータの項にあったように、2重唐草文は甲府城全域で広く出土する。これは特定の建物に使用されたのではなく、ほぼ全ての建物に使用されたと見ていいだろう。また数量的にも部分的な補修をおこなう補修瓦としてのみ用いられたとも考えにくい。ある時期に2重唐草文が甲府城全城の建物の軒先を飾っていたと考えられる。統いて層位の点で見ると人賀曲輪北下のトレンチのデータでは12種類の2重唐草の中でNHW-2・10・11グループとNHW-3・9グループの新旧関係を確認することができた。NHW-2・10・11グループのはうがNHW-3・9グループより古く、NHW-2・10・11グループの中でもNHW-2・10のはうがNHW-11より古いということである。ただこの層位のデータでは、2重唐草文が使用された時期を甲府城の歴史の中に位置づけることは困難である。ただし、金箔瓦層に含まれる2重唐草文が少ないので、前述の同時期は築城期以降であることは確実であろう。築城期以降といっても施城までは350余年の時間がある。この空間の中で2重唐草文が位置する時代を見出だす資料として、胎土分析のデータは興味深い。全体組成、岩石鉱物組成等の比較において、2重唐草文が似ているのは築城期の瓦であり、新しい時期となる棟瓦とは異なっている。また、河西学氏は、若草町加賀美瓦窯産の瓦と甲府城瓦（2重唐草文）とによる胎土分析の結果から類似性が低いことを指摘している²⁰。この加賀美瓦窯は、享保元年（1716）に製造が開始されたという伝承と嘉永4年（1851）に甲府城に瓦を納めた記録がある²¹。層位的な比較でも棟瓦を多く含む層より下層から2重唐草文は多く出土している。とすれば、2重唐草文は少なくとも1716年以前に使用が開始されていたわけである。築城期から1716年の間に大量需要のあったのは、寛文4年（1664）と宝永3年（1706）の修築であるから、2重唐草文はこの2つの修築のどちらかに限定するこ

とができるであろう。また、2重唐草文と築城期の瓦の胎土が似ていることから、築城期の瓦を製作した瓦窯で2重唐草文を製作した可能性も生まれる。とすれば、2重唐草文が使用された時期を築城期に近づけることができるので、寛文4年（1664）の修築にあてはめることができる。さらに層位のデータで確認できた2重唐草文内の新旧関係を考慮するならば、NHW-2・10・11グループが寛文4年（1664）修築時で、NHW-3・9グループが宝永3年（1706）の修築時という可能性も示唆できる。ただこうした時期決定の論拠をすすめていく上では、築城期の瓦の生産地特定と、加賀美瓦窯以外の瓦窯の瓦、あるいはそれ以外の生産遺跡出土瓦と2重唐草文のさらなる比較が必要になってくるであろう。ただし、木本健氏は、柳沢以前の生産地が明らかでない点について、修築などの需要期には、三河などの産地から職人を招へいし、官営窯を設立して焼いたために、産業として成立しなかったとしている¹⁵⁾。最後に甲府城以外の2重唐草文についても若干触れておく。今回の分類の条件をクリアしているもので現段階で確認しているのは熊本県の人吉城¹⁶⁾、福島県の泉城¹⁷⁾、奈良県の崇福寺¹⁸⁾、の3カ所であるが、いずれも2重唐草文の時期等については言明していない。

6 おわりに

本稿では甲府城出土の軒半瓦に着目した。その中でも比較的出土量の多い2重唐草文の分類を試みたわけであるが、今回用いた資料・データでは2重唐草文が使用された時期、製作された窯の明確な位置づけまではできなかった。ただ今回分類した2重唐草文以外の軒半瓦や軒丸瓦などの分類は今後の課題であり、これらの分類をすすめていくことで2重唐草文についての不明瞭な点が解明されていくであろう。また、全国的に調査、研究がすすめられている近世城郭・寺社等の瓦と比較していくことも課題の一つとして加えることができる。執筆にあたり、以下の方々にご指導・ご教示を頂いた。末筆ではあるが記して感謝する次第である。帝京大学山梨文化財研究所 河西 学、若草町商工会 塩谷一郎、彫刻家 柳本伊左雄、アートニイズマ 大芝孝二、甲府市教育委員会 信藤祐仁・志村憲一、山梨県埋蔵文化財センター 八巻興志夫、弦間千鶴、堀江淑美、土屋道子（順不同、敬省略）

註

- 1) 織豊期城郭資料集成「織豊期城郭の瓦」織豊期城郭研究会 1994
- 2) 織豊城郭 創刊号「織豊期城郭の瓦」織豊期城郭研究会 1994
- 3) 甲府城跡総合学術調査団編「甲府城総合調査報告書」山梨県教育委員会 1969
- 4) 大日本地誌大系「甲斐国志」第一卷「提要府治の項」雄山閣 1968
- 5) 註2参照 山梨県立図書館蔵 若尾資料「甲府日記」「寛文四年一月～十二月」写本 1916
- 6) 註2参照 「甲斐叢書」三卷「風流使者記」卷四 第一書房 1974
- 7) 大分県教育委員会「府内城ノ丸遺跡」 1993

- 8) 駒井鋼之助『かわら日本史』 雄山閣 1981
- 9) 坪井利弘『日本の瓦屋根』 理工学社 1976
- 10) 木戸雅寿『信長の城郭と大和系瓦工人』『織豊期城郭研究会研究集会資料 同範・同紋・同系』 織豊期城郭研究会 1994
- 11) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第74集『甲府城Ⅱ』 山梨県教育委員会 1992
- 12) 註11参照
- 13) 河西 学「甲府城瓦と加賀美瓦－岩石学的胎土分析による比較－」『山梨県考古学論集Ⅲ－山梨県考古学協会15周年記念論文集－』 山梨県考古学協会 1994
- 14) 若草町誌編纂委員会『若草町誌』 1990 加賀美瓦窯の発祥について1716年は伝承である。『甲斐国社記・寺記』の法善寺の項では、1798年頃を発祥とする。
- 15) 末木 健「山梨県に於ける近世瓦窯について」『山梨県考古学論集Ⅲ－山梨県考古学協会15周年記念論文集－』 山梨県考古学協会 1994
- 16) 人吉市教育委員会『人吉城跡Ⅳ』 1989 3点確認する。
- 17) いわき市埋蔵文化財調査報告第31冊『泉城跡』 いわき市 1992 2重府草文について江戸式と述べているが、時期についての詳細な説明はない。4点確認する。
- 18) 註1参照 1点確認する。

主要参考文献

- ・甲府城跡総合学術調査団編『甲府城総合調査報告書』 山梨県教育委員会 1969
- ・駒井鋼之助『かわら日本史』 雄山閣 1981
- ・菅原正明「紀州における近世瓦の系譜」『日本考古学協会第59回総会研究発表要旨』 日本考古学協会 1993
- ・末木 健「山梨県に於ける近世瓦窯について」『山梨県考古学論集Ⅲ－山梨県考古学協会15周年記念論文集－』 山梨県考古学協会 1994

県道塩平～窪平線拡幅工事に先立つ牧丘町曲田遺跡調査報告

高野玄明

-
- | | |
|---------------|---------|
| 1 調査に至る経緯 | 4 遺構と遺物 |
| 2 遺跡の位置と地理的環境 | 5まとめ |
| 3 周辺の遺跡と歴史的環境 | |
-

1 調査に至る経緯

曲田遺跡は、山梨県牧丘町蒲地字曲田に位置する。山梨県土木部塩山上木事務所から県教育委員会学術文化課に県道塩平～窪平線拡幅についての事業計画が提出された。そこで、学術文化課から依頼を受けた山梨県埋蔵文化財センターでは、試掘調査の必要があることから、学術文化課・埋蔵文化財センター・塩山土木事務所・工事請負者の立ち会いのもと、協議のうえ、試掘調査を行った。

試掘調査は、1992年1月8日、道路拡幅部分に、重機を使用して6ヵ所のトレンチを掘り、遺構・遺物の確認作業及び土層断面観察を行った(第3図)。その結果、1～3号トレンチは、台地の肩から斜面にかかる部分であり、遺構・遺物は確認できなかった。4・6号トレンチは台地平坦部であるものの、遺構・遺物の存在は確認できなかった。5号トレンチからは、地表下約60cmの盛り土下部に、焼土・炭・土器片を包含する黒褐色土層が検出されたため、確認部分についてのみ、1992年1月23日に調査を行うこととなった。

2 遺跡の位置と地理的環境

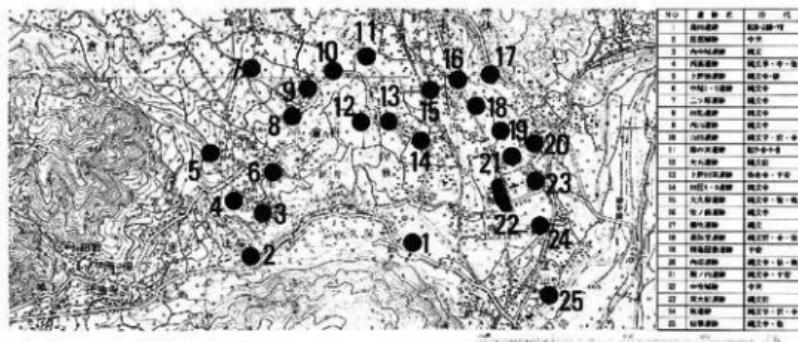
本遺跡の立地する牧丘町は、山梨県の北部中央、甲府盆地の北東部に位置し、総面積の約80%を山地で占める。北は国師ヶ岳、奥千丈岳、大弛峠を境として長野県南佐久郡川上村、西は倉沢山、乙女高原を境に甲府市、東は奥千丈岳、シベラ平、大烏山を境に三富村、南は犬狗山などを隔てて山梨市、東南は笛吹川を境に塩山市に接する。耕地は、笛吹川流域やその支流の琴川、鼓川、井戸川などのつくる小扇状地と級急複雑な丘陵地、可岸段丘上に開けている。土地は良く、灌漑も便利なため、現在はブドウ・モモ・スマモなど果実の生産と一部養蚕を営む農村地帯である。本遺跡は、笛吹川水系鼓川の南傾斜面の可岸段丘上に立地する。

3 周辺の遺跡と歴史的環境

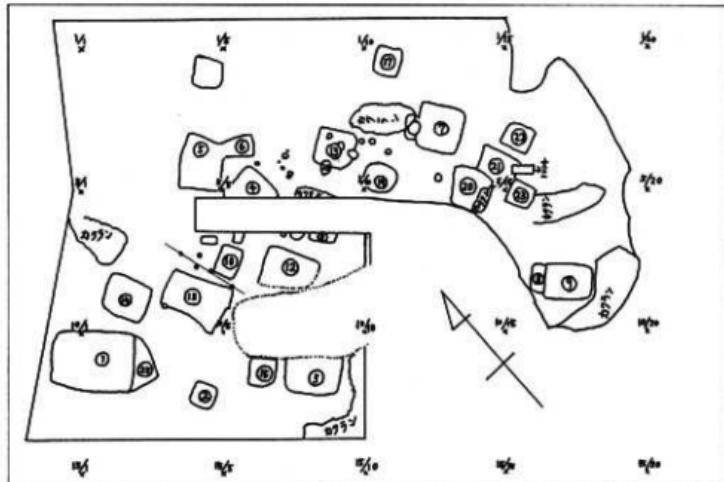
曲田遺跡周辺には数多くの遺跡が存在している(第1図)。1・曲田遺跡は、笛吹川水系鼓川の南傾斜面の河岸段丘上、標高510m付近に立地する。今回調査することになった県道のすぐ北側には牧丘町工業団地建設に伴う調査が、1992年2月8日～9月16日まで、牧丘町遺跡調査会が発掘調査を実施している。調査の結果、遺構は、縄文時代前期後半の竪穴状遺構3軒・古墳時代前期の住居址13軒・平安時代末期の住居址10軒・住居址と思われる遺構1軒・棚状遺構1・土坑16基が検出され、遺物は、黒曜石・水晶・台付甕・器台など縄文時代前期・古墳時

代前期・平安時代末期の複合遺跡であることが報告されている¹¹⁾(第2図)。

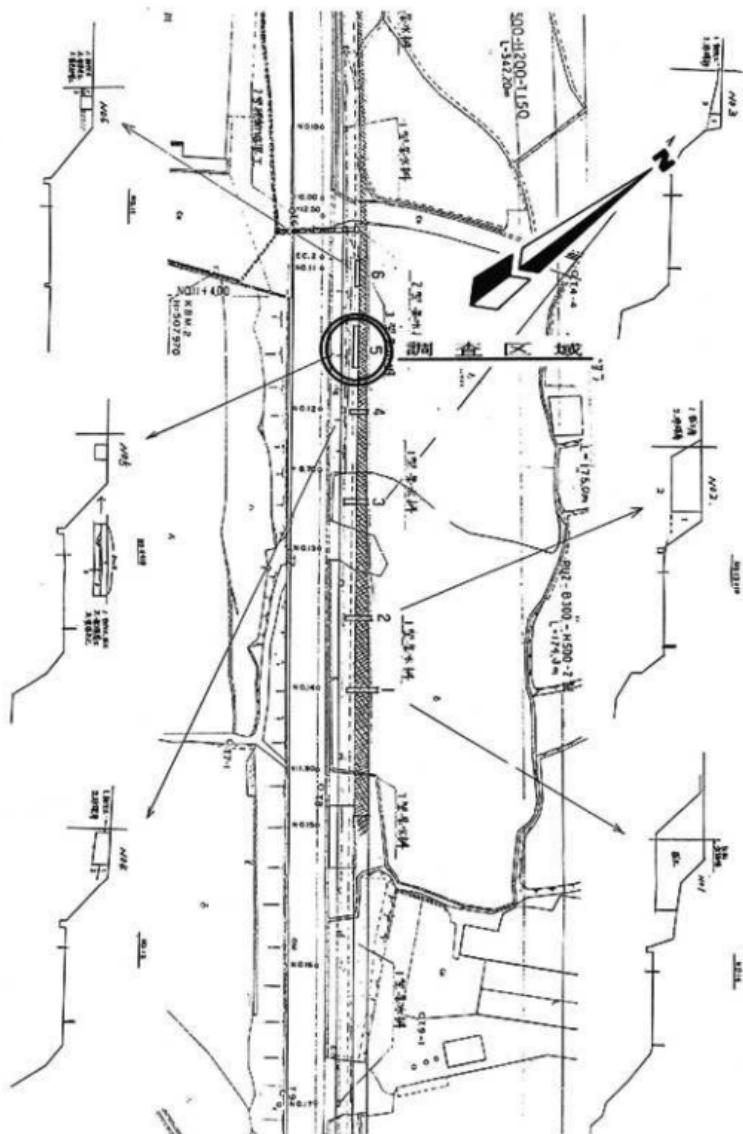
第1図で示したほかに、昭和48年に発掘調査された、古宿道の上遺跡が知られている。2軒の敷石住居が検出され、時代は縄文時代中期・後期初頭のものと報告されている。町内には縄文時代の遺跡は、上野原遺跡・東大庭遺跡・精進屋敷遺跡・松葉遺跡・西裏遺跡など、縄文時代早期から晩期に至るまでほぼ全般にわたり、町内の台地や丘陵上に遺跡が展開している。弥生時代になると上野田東遺跡など遺跡数は激減する。古墳時代の数は少なく曲田遺跡に代表されるが、ほとんど見られなくなり、奈良・平安時代になると遺跡数は増大していく。この様子から奈良時代以降になって集落が定着し、発展していったと考えられる。

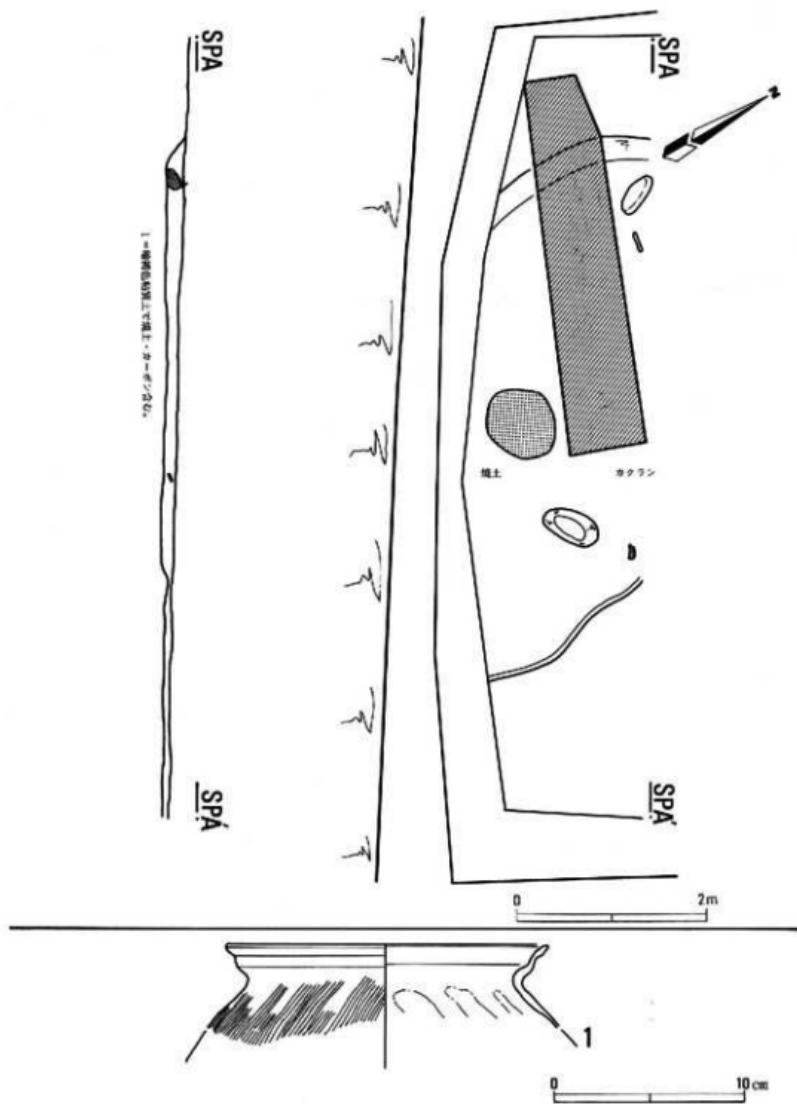


第1図 曲田遺跡と周辺の遺跡



第2図 1992年度上半期遺跡調査発表会要旨より転載
曲田遺跡全体図 (1/800)





第4図 曲田遺跡平面図及び出土遺物

4 遺構と遺物

(1) 遺構

遺構・遺物が確認された、5号トレンチ（第1図）を拡張して調査を行った結果、遺構と思われる落ち込みを検出した（第4図）。覆土は、暗褐色を呈し、焼土・カーボンが含まれる。調査範囲が狭いため、この土層が遺構覆土なのか、遺物包含層なのかは、平面及び断面では判断はできない。規模は、推定長径4.2mを呈する。搅乱により、西側の部分は確認できなかつたが、壁高は15cmを測る。また、底面には、焼上の集中箇所が直径0.7mの円形を呈する形で検出されている。また、部分的に、炭化材も見られた。

遺物は、S字状口縁台付壺の口縁の一部が出土していることから、古墳時代前期の住居址または、隣接する曲田遺跡の集落にかかわる一連の遺構であることは間違いないものと思われる。

(2) 遺物

遺構と思われる部分から、S字状口縁台付壺など小破片を含めると、相当量が出土している。（第4図）1・推定口径17.2cmを測る。口縁部の屈曲は緩やかで、胴部外面にはハケ調整が施される。胎土は粗く、金雲母・石英を多く含む。色調は、明褐色を呈する。

5 まとめ

今回の曲田遺跡は、道路拡幅のため調査面積が18m²と非常に狭く、完全な調査は出来なかつたが、隣接する牧丘町遺跡調査会がおこなった集落遺跡の一部と思われる遺構が確認された。古墳時代前期の住居址と思われる遺構であったが、遺物も図示できるものは1点だけであるものの、時代の決定ができた。隣接する集落遺跡では該期の住居址が13軒検出されていることから、この集落にかかわる一連の遺構と思われる。

本稿をまとめるにあたって、牧丘町教育委員会大崎文裕氏からご教示を得、また資料の実見に際して便宜を計っていただきました。末筆となりましたが記して感謝いたします。

註

1)大崎文裕 1992 「曲田遺跡」『1992年度上半期遺跡調査発表会要旨』

引用・参考文献

- ・山梨県教育委員会 1979 『山梨県遺跡地名表』
- ・牧丘町誌編纂委員会 1980 『牧丘町誌』
- ・文化庁文化財保護部 1981 『全国遺跡地図 山梨県』
- ・「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1984 『角川日本地名大辞典 19 山梨県』



曲田遺跡試掘調査風景



5号トレンチ調査風景（北東側より）



5号トレンチ調査風景（南東側より）



5号トレンチ完掘状況

甲府市八幡神社採集の縄文土偶

小野正文

1 経緯

この土偶は1993年に竜王町在住の上野大輔君が、甲府市武田の八幡神社境内で採集したものである。その後この遺物が何であるか、山梨県立考古博物館に実物を持参して預けられ、筆者が内容について検討していたものである。この間、多くの時間を費やすことになって、上野大輔君並びにご家族の方々および仲介の労をとられた原裕貴子氏にたいへんご迷惑をおかけした。ここにご寛容を願うとともに資料紹介をする次第である。

2 土偶について

土偶全体は灰黒色をなして、全体に表面が荒れている。これは粘土質の上層に包含された土器、土偶にしばしば見られる現象である。甲府市の地形から武田の一帯はほぼ粘土質の土壤なので、この土偶はこの付近の出土と思われるが、遺物の原位置についてはやや不安が残る。

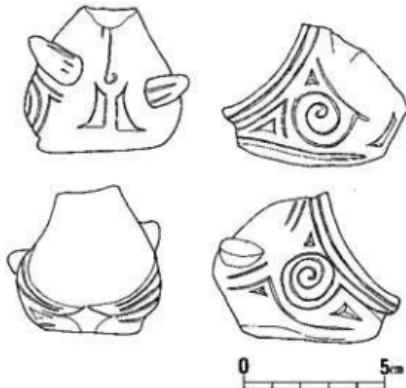
土偶は頭部と両腕を欠損しているが、両手は側腹部につけてある。脚部は省略された安定感のある土偶である。胸部から腹部にかけて生中線が沈線で描かれ。腰の部分で曲がっている。突き出した腹部の中央下には対象弧刻文があり、中期

前半の土偶であることは明らかである。臀部にはひし形文が陰刻されている。側腹部には沈線による渦巻き文と三叉文が陰刻されている。沈線文は表面が荒れていてはっきりしないが、結節であった可能性もある。

3 土偶の意義

脚が省略されていることから、座して両腕を輪にして手を側腹部に置いた姿勢をなすものと思われる。かつて藤森栄一氏によってお座をする土偶として紹介された長野県広畑の土偶と同形の土偶で、筆者が広畑形態の土偶と分類したものである。類例としては県内では上野原遺跡、秋葉堂遺跡群、東京都神谷原遺跡、長野県広畑遺跡にある。

こうした特徴ある形態の土偶は、縄文中期の集落のどの住居にも伴うものではなく、ある特定の住居に伴う可能性があり、土偶祭式のなかでも重要な位置を占めていたものと思われる。





甲府市八幡神社採集の縄文土偶写真

1995年3月31日 発行

研究紀要 11

編集・発行 山梨県立考古博物館

山梨県埋蔵文化財センター

印 刷 脇 岐 南 堂 印 刷 所

BULLETIN
OF
YAMANASHI PREFECTURAL
MUSEUM OF ARCHAEOLOGY
&
ARCHAEOLOGICAL CENTER
OF YAMANASHI PREFECTURE

Number 11
CONTENTS
March 1995

Adzes or Digger? What was the function of "DASEI-SEKIFU" in the Jomon period,
Japan (1)

— by Manabu MIYAZATO

Sutra Cases Donated to Temples and Shrines by *Rokuju Rokubu Hijiri* in the Medieval
Age

— by Takashi TASHIRO

Classification of Modern "Nokihira-kawara" — Kofu-Castle, as an example —

— by Hidetoshi KASHIWAGI

Results of an excavation of Magatta Site in Makioka Town which was conducted for
the widening of Shiodaira-Kubodaira Line

— by Genmyo TAKANO

A Jomon Clay Figurine from Hachiman Shrine Site, Kofu City

— by Masafumi ONO